上代石塚遺跡発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第三十五集

2001. 3

泉南市教育委員会

『上代石塚遺跡発掘調査報告書』　正誤表

訂正箇所	誤	正
PL.5　上段写真　キャプション	SD01I-J間断面付近（南東から）	SD01・02・03・07・08（北から）
PL.5　下段写真　キャプション	SD01・02・03・07・08（北から）	SD01I-J間断面付近（南東から）

2001.3　泉南市教育委員会

序　　文

私たちの街、泉南市も近年の開発の増加に伴い、その姿を大きく変えようとしています。しかし、以前は広大な耕作地のひろがる田園地帯で、今でも所々に往時の景観をとどめています。このような景観の中で、日頃から何気なく目にするものに溜池があげられます。市域においてその数は百近くにもなり、全国的に見ても溜池の多い地域といってもよいでしょう。これらの溜池は、田畑の水源として欠かせぬもので、田園風景のひろがる往時の景観は耕地開発により形成されたものといえるでしょう。

泉州地域は和泉山脈から派生し海岸線近くまでのびる丘陵や洪積段丘が発達し、河川が形成する沖積地の発達は河口付近の狭小な範囲にとどまります。そのため、耕作地の開発は灌漑技術の発展と期を同じくします。このような歴史のなかで、現在の景観が形成されたのですが、我々が目にする溜池がつくられる以前は、どのような灌漑施設が機能していたのでしょう。そして現在の景観が形成されたのは、いつ頃なのでしょうか。

このたび報告します上代石塚遺跡では、中世の大規模な溝が発見されました。市域における平野部の大半を占める洪積段丘の耕地化に伴う水路だと考えられます。これは溜池による灌漑体系に移行する以前のものです。今回の調査成果は、現在我々が目にする景観が形成される過程を解き明かすうえで、たいへん貴重な資料といえるでしょう。

文末ではございますが、調査に際しご援助、ご協力、ご理解をいただきました近隣住民ならびに関係者の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護行政にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成12年３月

泉南市教育委員会
教育長　亀田　章道

例　　言

1．本書は、辻野開発株式会社の大規模店舗建設に伴い、泉南市教育委員会が実施した上代石塚遺跡発掘調査の報告書である。

2．調査は泉南市教育委員会が辻野開発株式会社より依頼を受けて実施したもので、試掘調査および発掘調査の担当は以下の通りである。

試掘調査　担当者　岡田直樹、岡　一彦、松本堅吾（現・島根県斐川町教育委員会）

調査期間　１次事前調査（平成４年９月から同年10月）

２次事前調査（平成４年12月）

３次事前調査（平成７年３月）

発掘調査　担当者　河田泰之

調査期間　平成７年９月から同年11月

3．調査に要した費用は、辻野開発株式会社が負担した。

4．調査および整理の実施にあたっては、土井憲代をはじめ、植田哲也、上野亜紀子、江尻美代子、小浦尚美、大多和恵、小野泉、亀田啓介、蒲生徹幸、河村公美子、木村啓之、熊田聖子、蔵田弘幸、高力佳子、島津真理、下尻順子、真珠久美、杉野友美、高木謙次、高橋靖子、竹内伸一郎、谷本典子、玉置由紀、寺田純子、土井明彦、時松恵里、徳田二美、徳永素子、中谷めぐみ、新納延紀、八羽康代、浜口浩美、廣岡隆憲、藤野渉、牧野由起子、松本久美、松本真規子、真鍋紀美子、真鍋久美、向林智与、村上佳子、森本めぐみ、三木将司、南憲和、山田剛、養松敬子、横井佐絵子、横井佐和子、吉田朋子、若狭亜紀らの協力を得た。また、地元関係者から多大な援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

5．本書の執筆は、河田がおこなった。

6．調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡　　例

1．遺物実測図は１/２、１/４とし、遺構配置図や遺構断面図などは適時縮尺を変えている。また、遺物実測図と写真図版の図版番号は一致する。

2．本書で扱う基準高はT.P.（東京湾平均海水位）とし、記載の際はT.P.の記号を省略している。

3．遺構名称は、SD－溝、SX－不明遺構、Pit－柱穴としている。

4．遺物実測図の断面は、須恵器－黒塗り、弥生土器・土師器－白抜き、瓦器、瓦質土器－トーンのように塗りわけている。

5．遺構配置図および遺構平面図には、国土座標Ⅵ系にもとづく座標を記載しており、図上の方位は座標北を示す。

6．土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1992年版に準拠した。

目　　次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 1
第２章　周囲の環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 6
　第１節　基本層序 …… 6
　第２節　遺構 …… 6
　第３節　遺物 …… 11
第４章　泉南市域における灌漑体系の変遷について …… 13
　第１節　SD01とその他の溝との関係 …… 13
　第２節　泉南市域の灌漑体系におけるSD01の位置づけ …… 14
　第３節　まとめ …… 18
報告書抄録 …… 巻末

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置…… 1
第２図　調査区位置図…… 2
第３図　周辺遺跡分布図…… 3
第４図　SD01断面図－１…… 8
第５図　SD01断面図－２…… 9
第６図　SD02・07・08・11・13断面図 ……10
第７図　SD01出土遺物－１……11
第８図　SD01出土遺物－２……12
第９図　SD01とその他の溝との遺構底面レベルの比高差（断面１/80・平面１/1000）……13
第10図　市域の水利水系図……14

表　目　次

第１表　市域における灌漑遺構一覧……15

図　版　目　次

PL. 1　調査区周辺空中写真
PL. 2　調査区全景－1
PL. 3　調査区全景－2
PL. 4　SD01・02・11
PL. 5　SD01・02・03・07・08
PL. 6　SD01断面－1
PL. 7　SD01断面－2
PL. 8　SD01出土遺物

付　　図

付図1　遺構平面図

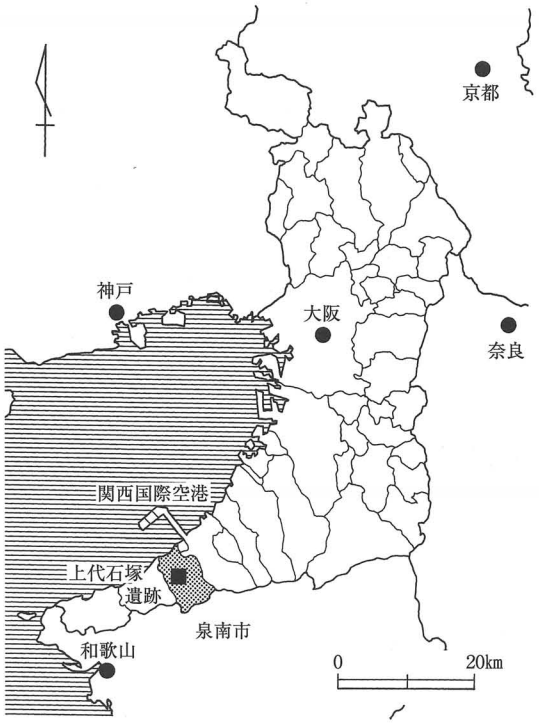
上代石塚遺跡発掘調査報告書

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯（第１・２図）

泉南市は大阪府の南部、泉南地域に位置する。近年、ベットタウンとして住宅都市化がすすみ、それに伴う消費者の増加により店舗などの開発件数が増加する傾向にある。特に泉南市域においては、平成６年の関西国際空港開港や、それに伴う道路網の整備により、住宅、店舗などの開発が急増している傾向にあった。

このような状況のなか、平成４年に泉南市信達牧野において大規模ショッピングセンター建設が計画された。開発者と市関係各課との協議がおこなわれた結果、事前に埋蔵文化財の有無を確認することとなった。事前調査は、１次事前調査（平成４年９月から同年10月）、２次事前調査（平成４年12月）がおこなわれ、このうち１次事前調査において遺構および遺物が確認された。その後、開発計画の進展がなかったが、平成６年８月に再度開発者側から計画が具体化されるとの連絡があった。この結果、３次事前調査（平成７年３月）がおこなわれ、事前調査の成果をもとに発掘調査を実施する範囲が確定された。



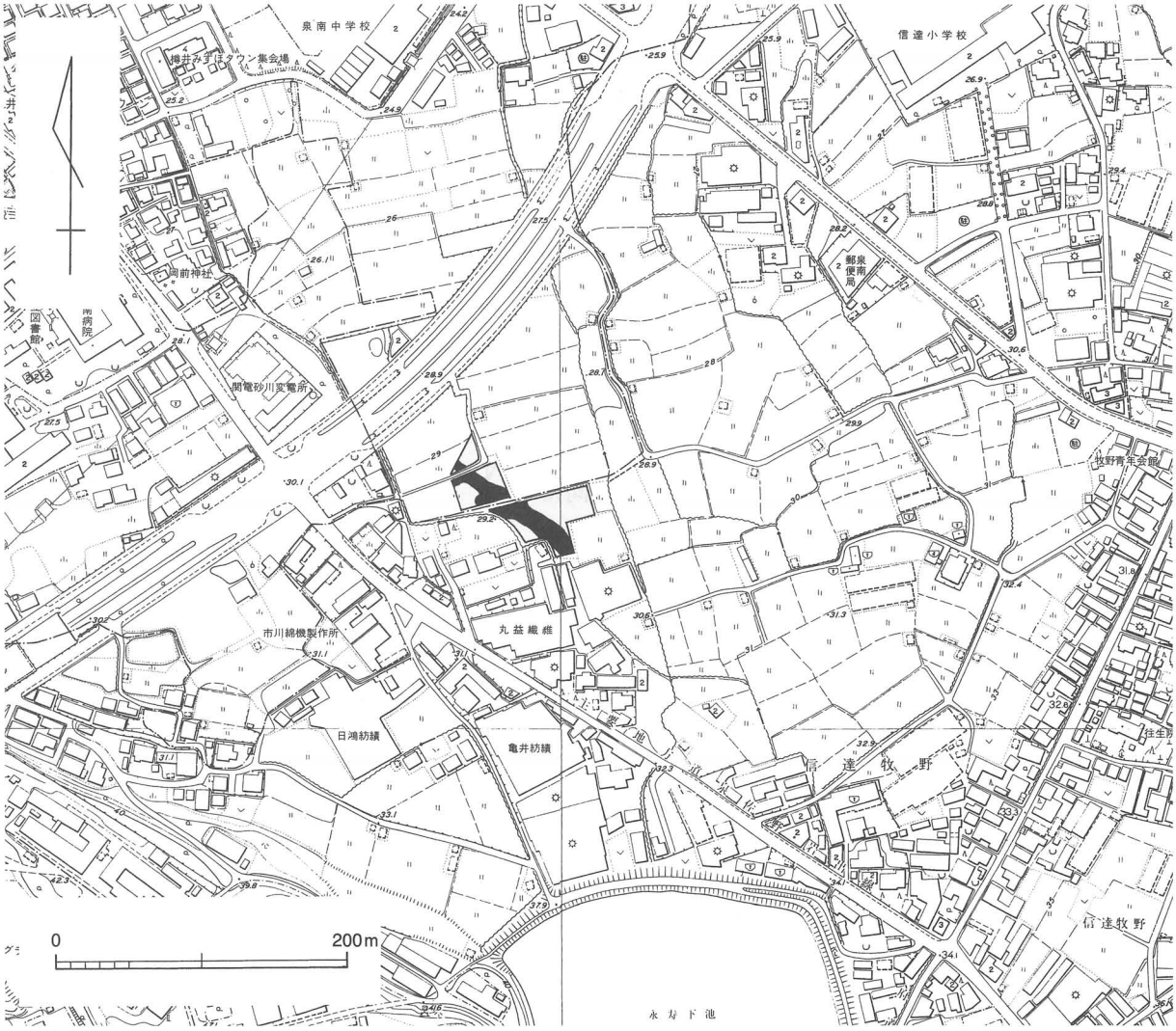
第１図　遺跡の位置

開発者側と市教委との協議の結果、調査対象は第１次事前調査で包含層と溝状遺構などが確認された部分とし、平成７年８月25日に覚書を交わした。対象面積は3398㎡で、調査は平成７年９月４日に着手し、同年11月14日に終了した。また、報告書作成のための整理作業も並行しておこない、本書の刊行に至っている。

第２節　調査の方法

発掘調査は、調査対象となった範囲のうち、里道と水路を除いた部分とした。掘削は、事前調査の成果から、現代耕作土層をバックホーにより掘削し、包含層である旧耕作土層の一部および遺構を人力掘削とした。

調査成果の記録にあたっては、方位は国土座標Ⅵ系にもとづく座標北、水準は東京湾標準潮位（T.P.）を使用した。また、調査に際し、調査区には国土座標Ⅵ系にもとづく５ｍ四方のグリッドを設定した。



第２図　調査区位置図

これは本市教育委員会で実施する発掘調査でおこなっている区割りで、大阪府都市計画図の１/2500地形図をもとにおこなうものである。

まず、都市計画図の区割り（2000m×1500m）を、500m四方12区画にわけＡ～Ｌの記号をつける。この各区画を、さらに100m四方25区画に分割し１～25までの番号をつける。さらに100m四方の各区画を５m四方400区画にわけ、Ｘ軸はＡ～Ｔ、Ｙ軸は１～20までの記号番号をつける。この５m四方の各グリッドは、グリッドの北西側を交差するＸＹ軸の記号番号で呼称され、例えばＡ１－１ａとなる。遺物の取り上げなどは、このグリッド単位でおこなった。

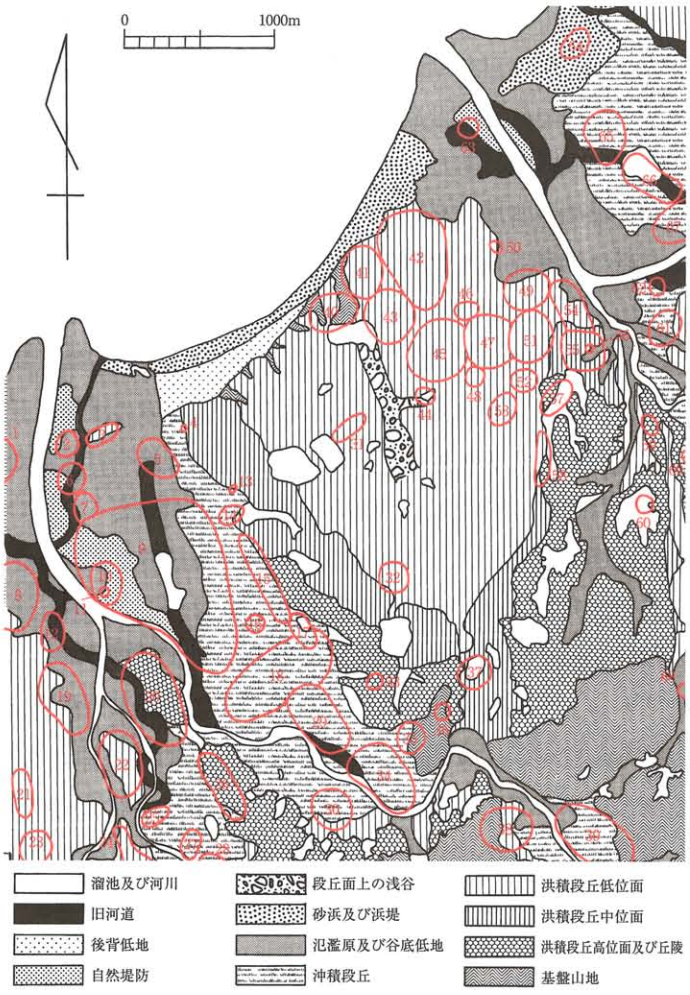
また、今回の調査において検出された遺構の平面図については、作業の迅速化、省力化をはかるため航空写真測量をおこなった。

第２章　周囲の環境（第３図）

泉南市域は、洪積段丘および丘陵が大半を占め、沖積地の発達は市域を画する男里川および樫井川の下流域に限られる。平野部における地形分類をみると、男里川右岸下流域では、現在の男里集落付近に自然堤防、現在の幡代から馬場集落付近にかけて沖積段丘がひろがり、その間は氾濫原及び谷底低地と旧河道がみられる。馬場集落の東には長山丘陵が位置し、丘陵東裾から樫井川までの平野部には、洪積段丘がひろがる。洪積段丘の東側にあたる樫井川下流域のうち、新家川との合流地点より下流域においては氾濫原及び谷底低地がひろがる。現在までに確認されている遺跡の多くが、男里川流域では氾濫原及び谷底低地、自然堤防、沖積段丘に、樫井川流域では洪積段丘低位面にそれぞれ位置しており、市域平野部の大半を占める洪積段丘において確認されている遺跡は少ない。以下、旧石器時代から中世までの歴史的環境を、これまでの発掘調査の成果と地形分類[1]とを対照しながらみていくこととする。

旧石器時代では、数点の遺物が確認されている。滑瀬遺跡[2]と男里遺跡[3]でナイフ形石器、海営宮池遺跡[4]で木葉形尖頭器がみつかっているが、いずれも遺構に伴うものではない。

縄紋時代では、草創期、前期、後期の遺物が確認されているほか、晩期の掘立柱建物などが検出されている。草創期では滑瀬遺跡[5]と岡田西遺跡[6]において有舌尖頭器が、前期では岡田東遺跡[7]において高山寺式土器やフキアゲ山東遺跡[8]において爪形文土器が、後期では岡田東遺跡において当該時期の土器[9]が確認されているが、いずれも明確



1	福嶋遺跡	20	平野寺跡	39	六尾遺跡	58	市場遺跡
2	キレト遺跡	21	正法寺遺跡	40	座頭池遺跡	59	向井山遺跡
3	天神ノ森遺跡	22	向出遺跡	41	氏の松遺跡	60	狐池遺跡
4	専徳寺遺跡	23	西畑遺跡	42	岡田遺跡	61	下村遺跡
5	戎畑遺跡	24	向山遺跡	43	岡田西遺跡	62	下村北遺跡
6	高田遺跡	25	高田西遺跡	44	坊主池遺跡	63	川原遺跡
7	男里北遺跡	26	高田山古墳群	45	中小路西遺跡	64	道ノ池遺跡
8	馬川遺跡	27	高田南遺跡	46	中小路北遺跡	65	田尻遺跡
9	男里遺跡	28	和泉鳥取遺跡	47	中小路遺跡	66	夫婦池遺跡
10	光平寺石造五輪塔	29	幡代南遺跡	48	中小路南遺跡	67	樫井西遺跡
11	光平寺跡	30	岡中西遺跡	49	新伝寺遺跡	68	石ヶ原遺跡
12	下出北遺跡	31	本田池遺跡	50	岡田東遺跡	69	上村遺跡
13	樽井南遺跡	32	上代石塚遺跡	51	北野遺跡		
14	男里東遺跡	33	奥ノ池遺跡	52	大苗代遺跡		
15	長山遺跡	34	岡中遺跡	53	仏性寺跡		
16	山ノ宮遺跡	35	林昌寺跡	54	一岡神社遺跡		
17	前田池遺跡	36	林昌寺瓦窯跡	55	海会寺跡		
18	幡代遺跡	37	信之池遺跡	56	海会寺瓦窯		
19	室堂遺跡	38	滑瀬遺跡	57	海営宮池遺跡		

第３図　周辺遺跡分布図

な遺構に伴うものではない。晩期では、男里遺跡北部の旧河道や氾濫原及び谷底低地、自然堤防にあたる地点で、掘立柱建物や溝⑩、河道⑪などが確認されている。

弥生時代では、前期、中期前葉、中期後半、中期末から後期初頭、終末期の遺構が確認されている。前期では、樫井川左岸の洪積段丘に位置する氏の松遺跡で、掘立柱建物で構成される集落が確認されている⑫。中期では、男里遺跡で遺構および遺物が数多くみつかっている。遺跡北西部の旧河道左岸の氾濫原及び谷底低地にあたる地点において中期前半の谷⑬がみつかっているほか、遺跡南東部の沖積段丘では中期後半の集落域や墓域⑭が確認されている。また、新家川右岸の沖積段丘に位置する下村遺跡⑮や、同じく右岸の洪積段丘低位面に位置する新家遺跡⑯で中期後半の土坑などが、新家川左岸の丘陵裾に位置する向井山遺跡⑰では方形周溝墓が確認されている。中期末頃から後期初頭では、金熊寺川左岸の丘陵上に位置する滑瀬遺跡⑱や、樫井川と新家川にはさまれた丘陵上に位置する新家オドリ山遺跡⑲で集落が確認されている。後期後半から終末期では、樫井川左岸の洪積段丘上に位置する岡田東遺跡で土坑⑳が確認されているほか、男里遺跡中央部の旧河道にあたる地点で河道が確認されている㉑。

古墳時代では、初頭、中期、後期の遺構が確認されている。初頭では、男里遺跡中央部の旧河道と氾濫原及び谷底低地にあたる地点㉒で河道が確認されている。中期では、男里遺跡北部の自然堤防にあたる地点で竪穴住居㉓が、同じく北部の氾濫原及び谷底低地にあたる地点で溝㉔が確認されている。後期では、洪積段丘に位置する岡田東遺跡で竪穴住居㉕が確認されている。また、中期以降の小規模な古墳も確認されている。平野部においては、男里遺跡北西部の自然堤防にあたる地点で小石室㉖が、丘陵部においては金熊寺川左岸に位置する丘陵上で高田山古墳群㉗や玉田山古墳群㉘のほか、樫井川と新家川の間に位置する丘陵上でフキアゲ山古墳群㉙や新家古墳群㉚などが確認されている。

飛鳥時代から奈良時代では、掘立柱建物や灌漑遺構などが確認されている。男里遺跡中央部の氾濫原及び谷底低地にあたる地点で掘立柱建物㉛が、遺跡東部の沖積段丘にあたる地点で竪穴住居や掘立柱建物㉜が確認されているほか、遺跡北部の旧河道にあたる地点でしがらみやそれに付随する溝㉝などの灌漑遺構も確認されている。また、樫井川左岸の自然堤防に位置する岡田東遺跡では掘立柱建物㉞が、新家川左岸の洪積段丘に位置する海会寺跡では寺院創建に先行する掘立柱建物群㉟が確認されている。

平安時代では、掘立柱建物や灌漑遺構が確認されている。男里川流域では、遺跡南東部の沖積段丘㊱と遺跡西部の自然堤防㊲にあたる地点で掘立柱建物が確認されているほか、沖積段丘に位置する戎畑遺跡で灌漑水路と考えられる溝㊳も確認されている。また、樫井川左岸の洪積段丘に位置する北野遺跡で掘立柱建物㊴が確認されている。

中世では、掘立柱建物、灌漑遺構や耕作痕などが確認されている。戎畑遺跡㊵や、男里遺跡西部の自然堤防にあたる地点㊶で鎌倉時代の掘立柱建物が確認されている。また、樫井川左岸の洪積段丘に位置する新伝寺遺跡において、区画溝を伴う掘立柱建物㊷が確認されている。このほか、耕作痕などの生産遺構は多く確認されており、特に男里遺跡東部の沖積段丘㊸や、樫井川左岸の洪積段丘に位置する岡田西遺跡、氏の松遺跡㊹、岡田遺跡などで検出されることが多い。また、灌漑水路と考えられる溝や井戸などが、男里遺跡㊺、岡田西遺跡、氏の松遺跡㊻、大苗代遺跡㊼、中小路西遺跡㊽などで確認されている。

注　①　豊田兼典氏による地形分類図。泉南市教育委員会「第３章　第１節地理的環境」『海会寺』（1987）参照。
　　②　（財）大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』（1987）

③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』(1999)
④ 泉南市史編纂委員会「原始の泉南」『泉南市史・通史編』(1987)
⑤ ②と同じ。
⑥ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)
⑦ ⑥と同じ。
⑧ ④と同じ。
⑨ ⑥と同じ。
⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡95－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』(1996)
⑪ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報№1』(1995)
泉南市教育委員会「男里遺跡96－6・7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』(1997)
⑫ ⑥と同じ。
⑬ 2000年度の市道新設に伴う泉南市教育委員会による調査。
⑭ 府道新設に伴う(財)大阪府埋蔵文化財協会と(財)大阪府文化財調査研究センターによる調査。
⑮ 泉南市教育委員会「下村遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』(1996)
⑯ 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報№1』(1995)
⑰ 泉南市教育委員会『向井山遺跡発掘調査報告書』(1972)
⑱ ②と同じ。
⑲ ④と同じ。
⑳ 石橋広和「弥生時代終末期における和泉南部地域の集落遺跡の変化」『古代』第99号　早稲田大学考古学研究会(1995)
㉑ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』(1997)
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』(1997)
㉒ ㉑と同じ。
㉓ 1999年度の市道新設に伴う泉南市教育委員会による調査。
㉔ 泉南市教育委員会「男里遺跡92－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』(1993)
㉕ 泉南市教育委員会「岡田東遺跡91－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』(1993)
㉖ ④と同じ。
㉗ ④と同じ。
㉘ 玉田山古墳発掘調査団『玉田山古墳発掘調査概要』(1961)
㉙ ④と同じ。
㉚ ④と同じ。
㉛ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
㉜ 泉南市教育委員会「男里遺跡96－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』(1997)
㉝ ㉑と同じ。
㉞ ㉕と同じ。
㉟ 泉南市教育委員会『海会寺』(1987)
㊱ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)
泉南市教育委員会「男里遺跡95－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ』(1996)
㊲ ㉛と同じ。
㊳ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』(1996)
㊴ 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報№1』(1995)
㊵ ㊳と同じ。
㊶ 泉南市教育委員会「男里遺跡55－1区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(1981)
㊷ 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡」『泉南市文化財年報№1』(1995)
㊸ ⑬と同じ。
㊹ ⑥と同じ。
㊺ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報№1』(1995)
㊻ ⑥と同じ。
㊼ 泉南市教育委員会「大苗代遺跡・Ⅰ」『泉南市文化財年報№1』(1995)
㊽ 泉南市教育委員会「中小路西遺跡93－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅡ』(1995)

第３章　調査の成果

第１節　基本層序（第４・５図）

調査区は、信達牧野の集落の北側にあたり、ながらく耕作地として利用されていたようである。事前調査の結果、調査区の基本的な層序は、おおまかに現代耕土層、中世の包含層である旧耕作土層、遺構のベース面である無遺物層の３層で構成されていることが確認された。調査にあたり、これらの層位をⅠ層からⅢ層とし基本層序とした。

Ⅰ層　調査区全体にひろがる現代耕土層をⅠ層とした。Ⅰ層は、調査区南西側（SD01Ｓ－Ｔ間断面の１層）において最も厚く、北西側にいくほど薄くなっているが、この比高差は現在の地割りが段状におこなわれていることに起因する。

Ⅱ層　調査区全体にひろがる旧耕作土をⅡ層とした。灰黄色系シルトで、調査区全体にほぼ均一な厚さで堆積している。マンガン粒の沈着がみられ、これをもとに大きく２層に大別できる。このⅡ層からは、中世の遺物が出土した。なお、調査区全体におけるⅡ層上面のレベル差がⅠ層ほど顕著でないことから、中世においてほぼ平坦な地割りであったものが、近・現代において段状のものに改変されている可能性が指摘できる。

Ⅲ層　遺構ベース面となる層位をⅢ層とした。調査区全体で土質と堆積状況を比較すると、北西部と南東部で堆積状況を異にする。調査区南東部（SD01Ｑ－Ｒ間断面）では灰白色のシルトや粗砂が、その北西30ｍの地点（SD01Ｍ－Ｎ間断面）では黄褐色の粘土と粗砂がほぼ水平に堆積しているが、調査区北西部（SD01Ｅ－Ｆ間断面図）では黄色系の粘土や粗砂がSD01に対して斜面堆積を呈している。調査区の現況を見ると、調査区のほぼ中央を東西に区画する段差がみられ、南東側の耕作地の方が30㎝ほど高い。また、遺構面全体のコンターをみても調査区の南東端のほうが北西端より１ｍほど高い。このことから、耕地化に伴い開発される以前の原地形は、南東から北西にかけてレベルを下げる谷地形であったと考えられる。

第２節　遺構（第４・５図、付図１）

調査で検出した遺構は、溝が14条、土坑が７基、ピットが57基である。すべてⅢ層上面で検出した。

SD01　検出長100ｍ、幅4.5～22ｍ、深さ約１ｍである。調査区南東部において、ほぼ水平堆積を呈している遺構ベース面（Ｍ－Ｎ間断面16・17層、Ｑ－Ｒ間断面20・21層）を堀込んでいることから、人為的に掘削された溝であると考えられる。また、遺構埋土にはラミナがみられることから、一定期間の緩やかな水流があったことがわかる。なお、遺構底面の比高差は、南東側が北西側より約0.8ｍ高い。

平面検出はおこなえなかったものの、断面を詳細にみると、埋没過程において一時期溝の底面であったと考えられる箇所（Ｋ－Ｌ間断面の10～13層、Ｍ－Ｎ間断面の５・６層など）が調査区各所の断面で確認できる。さらに、これらの埋没過程における溝（Ｋ－Ｌ間断面の13層を底面とする水路）が、直前に溝底面であったと考えられる土層（同断面の15・18層など）を堀込んでいる箇所が各断面においてみられることから、SD01は埋没過程において、幾度かの小規模な溝の掘り返しがおこなわれていたと考

えられる。なお、SD01完掘時の遺構底面において堰等の調水施設の痕跡は確認されなかった。

また、SD01の埋土は、ほぼ水平堆積を呈するところ（断面図中の網掛け部分）と、水流が運ぶ土砂によって堆積したことを示すところ（断面図中の網掛け部分とⅢ層との間）に大別できる。それぞれの堆積状況から、前者は流路としての機能を失ったのちの堆積（１層）、後者は流路として機能していた時点での堆積（２層）と考えられ、それぞれ遺物の取り上げをおこなった。遺物は、遺構南東部のSD07、08と合流する付近に集中する傾向がみられ、１層では、瓦器や土師器が、２層では瓦器などのほかに古墳時代の須恵器なども出土している。

SD02 長さ９m、幅1.5m、深さ0.2mである。遺構の両端がSD01に接する状態で検出した。遺構底面のレベルは、遺構北端が南端より0.1m高く、遺構北端におけるSD01底面との比高差は約0.7mである。断面をみると、３・４層などでラミナがみられることから、緩やかな水流があったことがうかがえる。また、埋没過程において一時期底面であったと考えられる層位（３層および４層）に切り合い関係がみられることから、埋没過程において掘り返しがおこなわれた可能性が考えられる。

SD02の平面プランをみると、遺構の両端がSD01とつながっていることから、両者は一連の遺構であることがうかがえる。さらに、SD01の土層断面に、SD02の遺構底面との比高差が0.1m前後の落ち込み（SD01Ｓ－Ｔ間断面の９層を底面とする箇所）が確認できることから、SD02はSD01が掘削された当初から併存していたと考えるより、SD01の埋没過程において掘削された溝の一部と考えたほうが理解しやすい。遺物は出土していない。

SD03 長さ5.5m、幅0.4m、深さ0.2mである。遺構南西端がSD01と接する溝であるが、平面プラン検出時にはSD01との切り合い関係は確認されなかった。遺構底面のレベルはほぼ水平で、SD01の遺構底面との比高差は約0.7mである。埋土は7.5YR６／１褐灰色シルトで、遺物は出土していない。

SD04 検出長5.3m、幅0.3m、深さ0.1mである。調査区南東部において検出した。SD05の延長線上に位置する。埋土は５Ｙ８／２灰白色シルトで、遺物は出土していない。

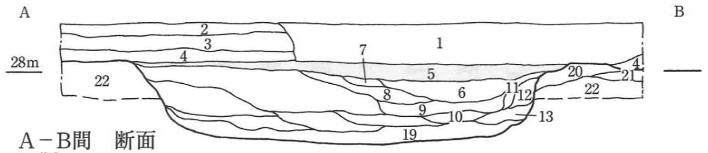
SD05 検出長６m、幅0.5m、深さ0.1mである。調査区南部で検出した。SD04の延長線上に位置する。埋土は５Ｙ８／２灰白色シルトで、遺物は出土していない。

SD06 検出長2.5m、幅１m、深さ0.05mである。調査区東部で検出した。埋土は５Ｙ８／２灰白色シルトで、遺物は出土していない。

SD07 検出長12m、幅0.5～６m、深さ0.3mである。調査区南部で検出した。遺構西端がSD01と接するが、平面プラン検出時にSD01との切り合い関係は確認されなかった。遺構底面は東端が西端より0.1m高く、SD01の遺構底面との比高差は約0.6mである。埋土は黄色系のシルト質で、遺物は出土していない。

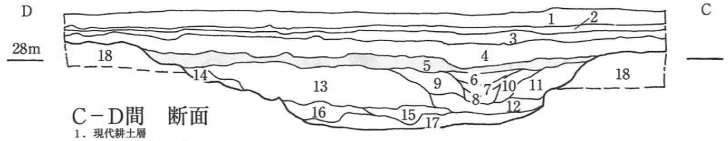
SD08 検出長4.2m、幅0.9～5.5m、深さ0.4mである。調査区南西端で検出した。遺構北端がSD01と接するが、平面プラン検出時にSD01との切り合い関係は確認されなかった。遺構底面は遺構南端が北端より0.1m高く、SD01の遺構底面との比高差は約0.4mである。埋土は黄褐色系のシルトや砂からなり、遺物は出土していない。

SD09 検出長3.4m、幅0.2m、深さ0.5mである。調査区南西部で検出した。平面プラン検出時の切り合い関係から、SD01が埋没した後の遺構だと考えられる。埋土は５Ｙ８／２灰白色シルトで、遺物は出土していない。



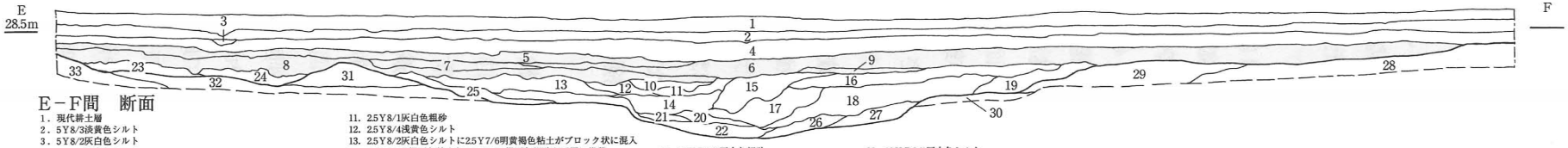
A－B間　断面

1．攪乱
2．現代耕土層
3．5Y6/3オリーブ黄色シルト
4．5Y6/2灰オリーブ色シルト
5．10Y R6/6明黄褐色粘土に2.5Y 7/1灰白色シルトがブロック状に混入
6．2.5Y 7/4浅黄色シルト
7．2.5Y 7/2灰黄色粗砂
8．2.5Y 6/2灰黄色シルト
9．10Y R6/1褐灰色シルト
10．2.5Y 6/1黄灰色細砂（炭化物含む）
11．5Y 7/1灰白色粗砂
12．2.5Y 7/1灰白色粗砂（2㎝程度の礫混）
13．2.5Y 7/2灰黄色細砂
14．2.5Y 6/3にぶい黄色細砂
15．2.5Y 7/2灰黄色細砂
16．2.5Y 7/1灰白色粗砂（2㎝程の礫混）
17．2.5Y 7/3浅黄色細砂
18．10Y R7/1灰白色粗砂
19．2.5Y 7/1灰白色粗砂（2㎝程の礫混）
20．10Y R7/8黄橙色礫（2㎝程）
21．2.5Y 7/3浅黄色粗砂（5㎝程の礫混）
22．10Y R5/6黄褐色粘土



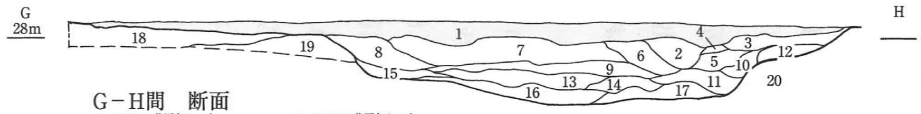
C－D間　断面

1．現代耕土層
2．5Y 7/4浅黄色シルト
3．2.5Y 6/3にぶい黄色シルト
4．5Y 7/3浅黄色シルト
5．5Y 7/3浅黄色シルト
6．2.5Y 6/3にぶい黄色シルト
7．5Y 7/2灰白色シルト
8．7.5Y 7/2灰白色細砂
9．7.5Y 7/1灰白色シルト
10．10Y 7/2灰白色シルト
11．5Y 7/3浅黄色粗砂
12．10Y 7/1灰白色シルトと10Y R5/2灰黄褐色細砂が互層に堆積
13．10Y R7/6明黄褐色細砂
14．2.5Y 7/3浅黄色粗砂
15．10Y R7/2にぶい黄橙色粗砂と10Y 7/1灰白色シルトが互層に堆積
16．10Y R7/1灰白色粗砂
17．2.5Y 7/1灰白色粗砂（5㎝程の礫混）
18．10Y R5/6黄褐色粘土



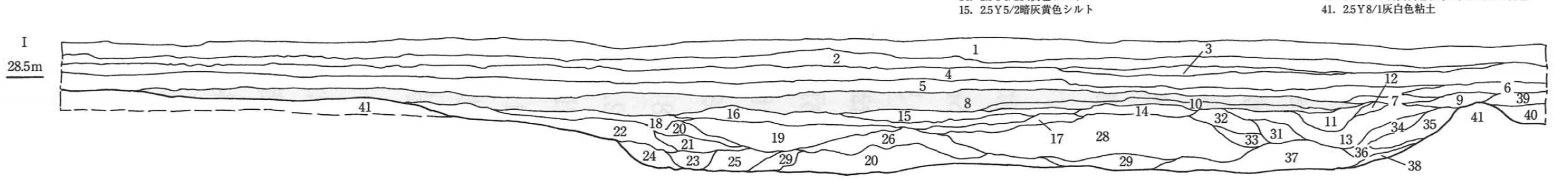
E－F間　断面

1．現代耕土層
2．5Y8/3淡黄色シルト
3．5Y8/2灰白色シルト
4．5Y8/1灰白色シルト
5．2.5Y8/2灰白色シルト
6．2.5Y 7/2黄灰色シルトに10Y R8/6黄橙色粘土がブロック状に混入
7．10Y R7/3にぶい黄橙色粘土
8．2.5Y8/1灰白色シルトに2.5Y 7/8黄色粘土がブロック状に混入
9．2.5Y8/2灰白色シルト
10．5Y8/2灰白色シルトに7.5Y 8/4浅黄橙色粘土がブロック状に混入
11．2.5Y8/1灰白色粗砂
12．2.5Y8/4浅黄色シルト
13．2.5Y8/2灰白色シルトに2.5Y 7/6明黄褐色粘土がブロック状に混入
14．10Y R4/1褐灰色粘土と10Y R6/1褐灰色細砂が互層に堆積
15．2.5Y6/3にぶい黄色細砂
16．5Y8/2灰白色シルト
17．2.5Y 7/6明黄褐色細砂
18．10Y R6/8明黄褐色細砂
19．10Y R8/1灰白色細砂
20．10Y R6/2灰黄褐色細砂
21．10Y R7/2灰白色細砂
22．2.5Y 7/3浅黄色粘土
23．2.5Y8/2灰白色シルト
24．2.5Y8/1灰白色シルト
25．10Y R8/1灰白色シルト
26．7.5Y R5/8明褐色粘土（3㎝程の礫混）
27．2.5Y 7/3浅黄色粗砂（2㎝程の礫混）
28．10Y R8/1灰白色シルト
29．2.5Y8/4淡黄色粗砂
30．2.5Y 7/6明黄褐色粗砂
31．2.5Y 7/6明黄褐色粗砂
32．2.5Y 7/6浅黄色粗砂（2㎝程の礫混）
33．10Y R5/8黄褐色粘土



G－H間　断面

1．2.5Y 6/1黄灰色シルト
2．2.5Y 7/2灰黄色細砂
3．10Y R6/8明黄褐色細砂
4．2.5Y 7/3浅黄色シルト
5．5Y 7/3浅黄色シルト
6．2.5Y 6/2灰黄色シルト
7．5Y 7/2灰白色細砂
8．2.5Y 7/4浅黄色細砂
9．5Y 6/2灰オリーブ色シルト
10．2.5Y 6/3にぶい黄色シルト
11．2.5Y 6/1黄灰色シルト
12．2.5Y 7/1灰白色シルト
13．5Y 6/3オリーブ黄色シルト
14．5Y 6/1灰色シルト
15．5Y 7/2灰白色シルト
16．5Y 5/1灰色シルト
17．10Y R6/1褐灰色細砂（5㎝程の礫多混）
18．2.5Y 7/3浅黄色シルト
19．2.5Y 7/5明黄褐色シルト（1㎝程の礫混）
20．10Y R6/6明黄褐色粘土（3㎝程の礫多混）

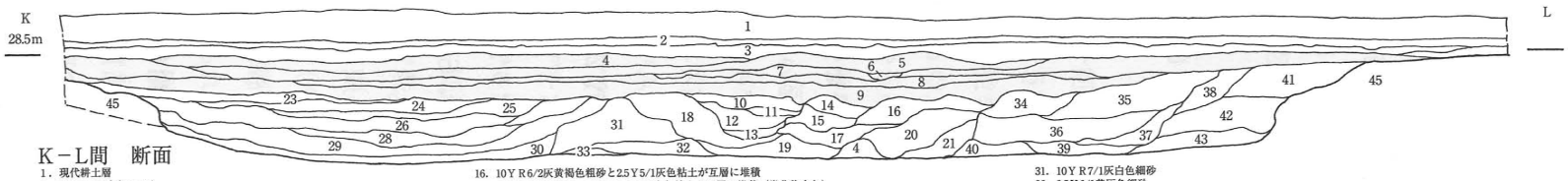


I－J間　断面

1．現代耕土層
2．10Y R6/2灰黄色シルト
3．2.5Y 7/2灰黄色シルト
4．2.5Y 5/3黄褐色シルト
5．2.5Y 6/4にぶい黄色シルト
6．10Y R5/2灰黄褐色シルト
7．5Y 7/3浅黄色細砂と5Y 7/1灰白色粘土が互層に堆積
8．5Y 6/2灰オリーブ色シルト
9．10Y R7/1灰白色細砂と10Y R6/1褐灰色粘土が互層に堆積
10．2.5Y 8/1灰白色シルト
11．10Y R6/6明黄褐色細砂
12．5Y 6/1灰色シルト
13．10Y R2/3褐灰色粘土と10Y R6/2灰黄褐色粗砂が互層に堆積
14．2.5Y 6/2灰黄色シルト
15．2.5Y 5/2暗灰黄色シルト
16．2.5Y 6/2灰黄色細砂
17．2.5Y 6/2灰黄色シルト
18．2.5Y 7/1灰白色シルト
19．2.5Y 7/4浅黄色細砂
20．2.5Y 5/1黄灰色粘土と2.5Y 6/1黄灰色細砂が互層に堆積
21．2.5Y 7/3浅黄色細砂
22．2.5Y 6/2灰黄色シルト
23．5Y 7/3浅黄色細砂（2㎝程の礫混）
24．5Y 5/1灰色粗砂
25．2.5Y 6/1黄灰色粘土と2.5Y 4/1黄灰色細砂が互層に堆積（2㎝程の礫混）
26．5Y 4/1灰色シルトと5Y 4/2暗オリーブ色細砂が互層に堆積
27．2.5Y 6/3にぶい黄色細砂
28．2.5Y 6/4にぶい黄色細砂
29．2.5Y 7/2灰黄色細砂（2㎝程の礫混）
30．2.5Y 6/4にぶい黄色細砂
31．2.5Y 5/2暗灰黄色シルト
32．10Y R7/3にぶい黄橙色シルト
33．10Y R7/2にぶい黄橙色シルト
34．10Y R6/1褐灰色粘土と10Y R6/2灰黄褐色粗砂が互層に堆積
35．5Y 7/2灰白色粘土
36．5Y 3/2オリーブ黒色粘土
37．10Y R7/2にぶい黄橙色細砂
38．10Y R4/6褐色細砂
39．10Y R6/6明黄褐色粗砂
40．5Y R6/6明黄褐色細砂（3㎝程の礫混）
41．2.5Y 8/1灰白色粘土

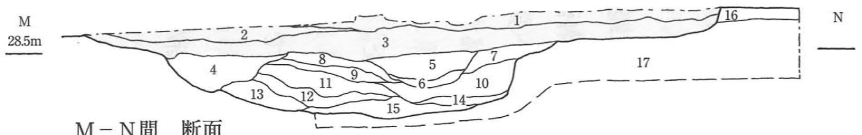
0　2m

第４図　SD01断面図－１



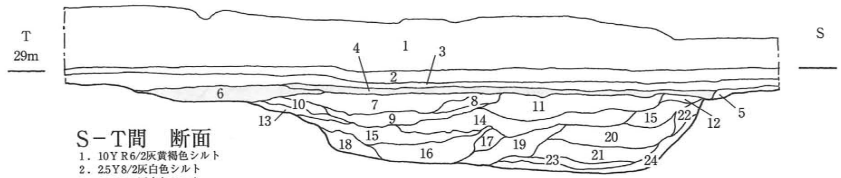
K－L間　断面

1．現代耕土層
2．5YR8/1灰白色シルト
3．2.5Y8/2灰白色シルトに10Y R7/6明黄褐色粘土がブロック状に混入
4．10Y R8/1灰白色シルト
5．7.5Y R8/1灰白色シルト
6．5Y8/2灰白色シルト
7．2.5Y8/2灰白色シルトに10Y R7/6明黄褐色粘土がブロック状に混入
8．5Y7/1灰白色シルト
9．2.5Y6/2灰黄色粘土
10．2.5Y8/1灰白色シルト
11．10Y R6/2灰黄褐色シルト
12．10Y R8/1灰白色粗砂と10Y R7/2純黄橙色粘土が互層に堆積
13．5Y5/1灰色粘土と10YR4/2灰黄褐色シルトが互層に堆積
14．7.5Y R7/2明褐灰色粗砂と2.5Y8/1灰白色シルトが互層に堆積
15．10Y R7/2にぶい黄橙色粗砂
16．10Y R6/2灰黄褐色粗砂と2.5Y5/1灰色粘土が互層に堆積
17．10YR5/1褐灰色シルトと5Y8/1灰白色粘土が互層に堆積（炭化物含む）
18．10Y R7/2純黄橙色細砂（2cm程の礫混）
19．2.5Y5/2暗灰黄色細砂と2.5Y7/2灰黄色粗砂が互層に堆積
20．7.5Y R5/2灰褐色粗砂と5Y8/1灰色粘土が互層に堆積
21．10Y R5/1褐灰色粘土と10Y R6/1褐灰色細砂が互層に堆積
22．5Y8/2灰白色シルトに2.5Y8/8黄色粘土がブロック状に混入
23．10Y R6/1褐灰色細砂
24．2.5Y6/3純黄色シルト
25．2.5Y6/3純黄色シルト
26．10Y R4/2灰黄褐色粘土
27．2.5Y5/1灰色粘土と10Y R4/2灰黄褐色シルトが互層に堆積
28．10Y R4/1褐灰色粘土と10Y R6/1褐灰色細砂が互層に堆積
29．10Y R5/1褐灰色細砂と10Y R3/1黒褐色粘土が互層に堆積（炭化物含む・2cm程の礫混）
30．2.5Y6/2灰黄色細砂（2cm程の礫混）
31．10Y R7/1灰白色細砂
32．2.5Y6/1黄灰色細砂
33．2.5Y7/4浅黄色粗砂（3cm程の礫混）
34．10YR5/1褐灰色シルトと5Y8/1灰白色粘土が互層に堆積（炭化物含む）
35．10Y R7/2純黄橙色細砂（2cm程の礫混）
36．7.5Y6/1灰色粗砂
37．7.5Y7/1灰白色粗砂
38．10Y R8/8黄橙色シルト
39．10Y R7/1灰白色粗砂
40．10YR8/6黄橙色シルトに2.5Y8/1灰白色粘土がブロック状に混入
41．10Y R6/3明黄褐色粗砂
42．10Y R8/2灰白色粘土に10Y R5/6黄褐色粘土がブロック状に混入
43．10Y R7/6黄橙色シルトに10Y R8/1灰白色粘土がブロック状に混入
44．10Y R7/8黄橙色粗砂
45．10Y R8/1灰白色シルト



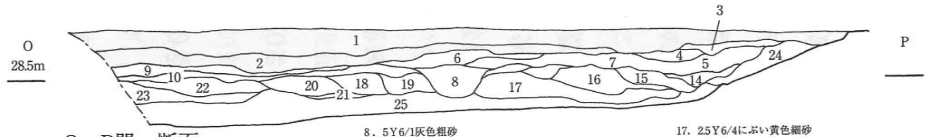
M－N間　断面

1．2.5Y6/1黄灰色シルト
2．10Y R7/1灰白色細砂
3．2.5Y6/2灰黄色シルト
4．2.5Y7/1灰白色粗砂と2.5Y6/1黄灰色粘土が互層に堆積
5．10Y R7/2にぶい黄橙色シルト
6．2.5Y7/3浅黄色粗砂
7．2.5Y7/2灰黄色シルト
8．2.5Y6/2灰黄色シルト
9．2.5Y5/2暗灰黄色シルト
10．2.5Y7/2灰黄色シルトと5Y7/2灰白色細砂が互層に堆積
11．10Y R6/2灰黄褐色シルト
12．2.5Y5/1黄灰色シルト
13．10Y R6/1褐灰色シルトに10Y R6/6明黄褐色粘土がブロック状に混入
14．7.5Y R5/1褐灰色シルト（炭化物含む）
15．7.5Y R5/1褐灰色シルトに10Y R7/2灰白色粘土がブロック状に混入
16．2.5Y7/6明黄褐色粘土
17．7.5Y R7/8黄橙色粗砂（5cm程の礫多混）



S－T間　断面

1．10Y R6/2灰黄褐色シルト
2．2.5Y8/2灰白色シルト
3．2.5Y8/1灰白色シルト
4．10Y R7/2にぶい黄橙色シルト
5．2.5Y8/3淡黄色シルト
6．10Y R7/1灰白色シルト（2cm程の礫混）
7．2.5Y6/1黄灰色シルト
8．10Y R5/2灰黄褐色シルトと7.5Y R5/6明褐色粘土が互層に堆積
9．7.5Y R6/1褐灰色シルト
10．2.5Y8/2灰白色細砂に7.5Y R5/6明褐色粘土が互層に堆積
11．10Y R6/3にぶい黄橙色シルト
12．10Y R6/4にぶい黄橙色シルト
13．2.5Y7/1灰黄色シルトと2.5Y5/2暗灰黄色粘土が互層に堆積
14．2.5Y6/2灰黄色シルトに2.5Y5/1灰黄色粘土がブロック状に混入
15．10Y R4/2灰黄褐色細砂と10Y R7/6明黄褐色シルトが互層に堆積
16．10Y R6/8灰褐色シルト
17．10Y R6/6明黄褐色シルト
18．10Y R8/1灰白色細砂と10Y R3/1黒褐色シルトが互層に堆積
19．10Y R6/2灰黄褐色細砂
20．10Y R6/3にぶい黄橙色細砂と10Y R3/1黒褐色粘土が互層に堆積
21．10Y R5/2灰黄褐色細砂
22．10Y R4/6褐色細砂
23．10Y R6/6明黄褐色粗砂
24．5Y R6/6明黄褐色細砂（3cm程の礫混）

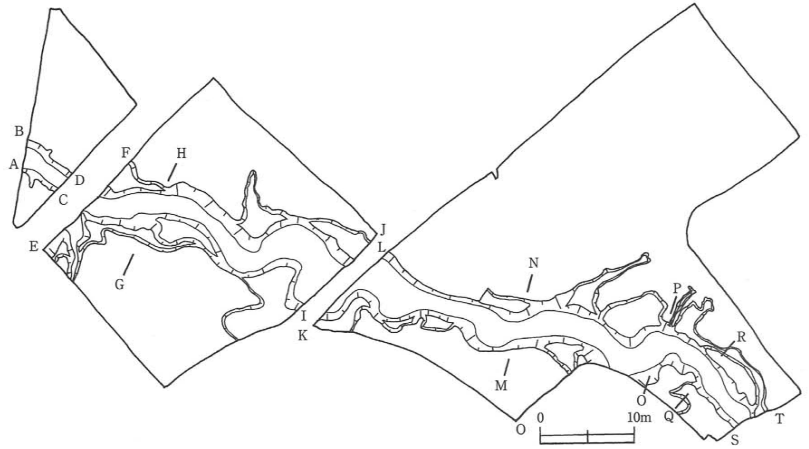


O－P間　断面

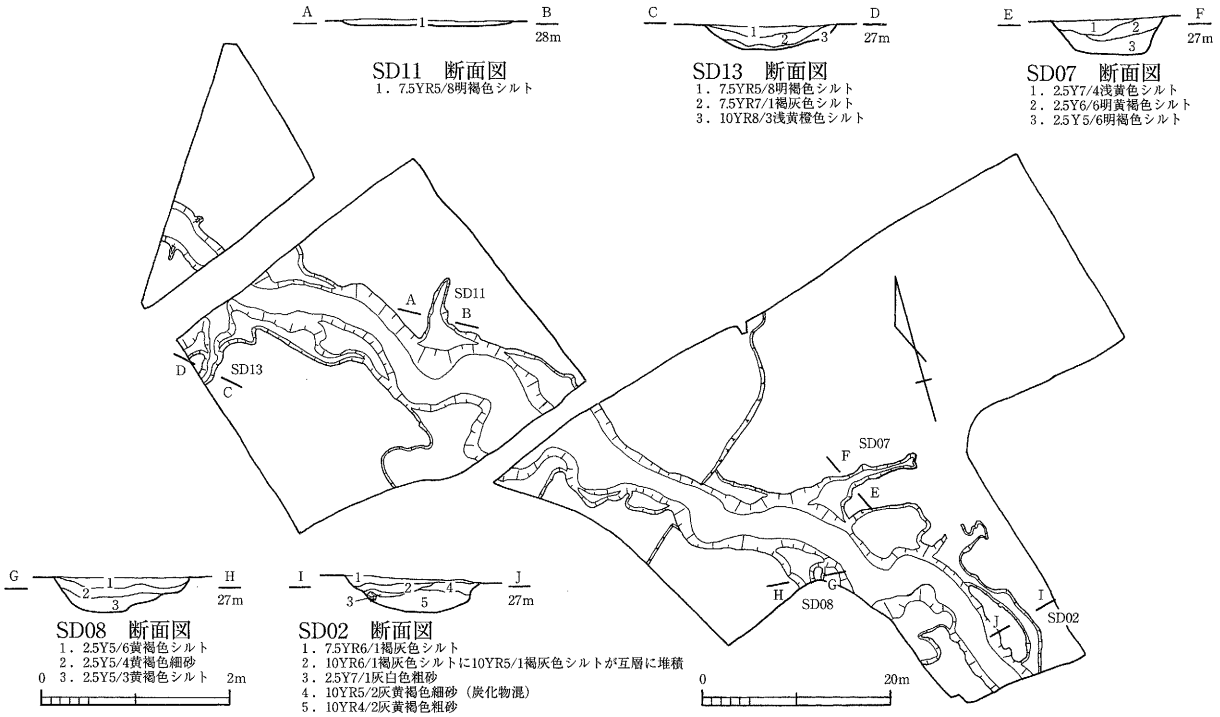
1．2.5Y6/1黄灰色シルト
2．10Y R7/1灰白色シルト
3．10Y R7/2灰白色シルト
4．10Y R6/1褐灰色細砂
5．2.5Y6/1黄灰色細砂と2.5Y7/2灰黄色粗砂が互層に堆積
6．2.5Y6/2灰黄色細砂
7．2.5Y7/2灰黄色細砂
8．5Y6/1灰色粗砂
9．10Y R6/1褐灰色細砂
10．2.5Y6/1黄灰色細砂
11．2.5Y7/1灰白色粗砂
12．2.5Y6/2灰黄色粗砂
13．5Y7/1灰白色粗砂（1cm程の礫混）
14．10Y R7/1灰白色粗砂
15．2.5Y6/1黄灰色細砂と10Y R6/1褐灰色粗砂が互層に堆積
16．2.5Y6/3にぶい黄色細砂
17．2.5Y6/4にぶい黄色細砂
18．2.5Y6/1黄灰色シルト
19．2.5Y6/4にぶい黄色細砂
20．2.5Y7/3浅黄色粗砂と10Y R6/1褐灰色細砂が互層に堆積
21．10Y R6/2灰黄褐色粗砂
22．10Y R7/1灰白色粗砂（2cm程の礫混）
23．10Y R7/1灰白色細砂
24．10Y R7/1灰白色細砂（5cm程の礫混）
25．10Y R6/1褐灰色細砂

Q－R間　断面

1．2.5Y6/1黄灰色シルト
2．10Y R6/1褐灰色細砂
3．2.5Y6/1黄灰色シルト
4．2.5Y6/2灰黄色シルト
5．2.5Y7/2灰黄色細砂
6．10Y R6/6明黄褐色粗砂
7．10Y R6/1褐灰色細砂
8．2.5Y6/2灰黄色シルト
9．5Y6/1灰色シルト
10．2.5Y7/3浅黄色シルト（炭化物が互層に堆積）
11．2.5Y5/4明褐色シルト
12．10Y R5/6黄褐色粗砂
13．2.5Y5/1黄灰色細砂
14．10Y R5/1褐灰色シルト
15．10Y R6/1褐灰色シルト
16．2.5Y7/1灰白色シルト
17．2.5Y7/2灰黄色細砂（2cm程の礫混）
18．2.5Y6/1黄灰色粗砂
19．2.5Y8/2灰白色粗砂
20．2.5Y8/1灰白色シルト
21．2.5Y8/2灰白色粗砂（5～15cmの礫多混）



第5図　SD01断面図－2



第6図　SD02・07・08・11・13断面図

SD10 検出長1.6m、幅0.2m、深さ0.1mである。調査区南西部で検出した。遺構北端が削平を受けており本来の平面プランをとどめていない。埋土は5Y8/2灰色シルトで、遺物は出土していない。

SD11 検出長7.5m、幅1～6.5m、深さ0.1mである。遺構南西端がSD01と接するが、平面プラン検出時にSD01との切り合い関係は確認されなかった。遺構底面は遺構北東端が南西端より0.25m高く、SD01の遺構底面との比高差は約0.5mである。埋土は明褐色シルトで、遺物は出土していない。

SD12 検出長11.5m、幅0.5m、深さ0.15mである。調査区北東部で検出した。埋土は、2.5Y7/8黄色シルトで、遺物は出土していない。

SD13 検出長7m、幅1.5～6m、深さ0.5mである。遺構北東端がSD01と接するが、平面プラン検出時にSD01との切り合い関係は確認されなかった。底面は遺構南西端が北東端より0.2m高く、SD01の遺構底面との比高差は約0.2mである。埋土は黄褐色系のシルト質で、遺物は出土していない。

SD14 検出長1.8m、幅0.2m、深さ0.05mである。調査区西部で検出した。埋土は5Y8/2灰色シルトで、遺物は出土していない。

SX01 直径1.1m、深さ0.2mである。調査区南東部で検出した。埋土は2.5Y6/3にぶい黄色シルトで、遺物は出土していない。

SX02 長さ0.4m、幅0.2m、深さ0.1mである。調査区南東部で検出した。埋土は5Y8/2灰白色シルトで、遺物は出土していない。

SX03 長さ2.5m、幅0.6m、深さ0.01mである。調査区南東部で検出した。埋土は5Y8/2灰白色シルトで、遺物は出土していない。

SX04 長さ1.6m、幅0.5m、深さ0.2mである。調査区南東部で検出した。埋土は5Y8/2灰白色シルトで、遺物は出土していない。

SX05 幅7.5m、深さ0.2mである。調査区南西部で検出した。SD01との切り合い関係から、SD01に先行する遺構である。埋土は2.5Y６/３にぶい黄色シルトで、遺物は出土していない。

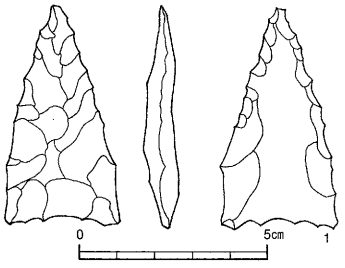
SX06 長さ1.9m、幅0.4m、深さ0.1mである。調査区北東部で検出した。埋土は５Y８/２灰白色シルトで、遺物は出土していない。

SX07 長さ3.2m、幅２m、深さ0.2mである。調査区西部で検出した。埋土は５Y７/１灰色シルトで、遺物は出土していない。

Pit群 調査区北東部において特に密集して検出された。いずれも、直径0.3m、深さ0.2m程で、埋土は５Y８/２灰白色シルトである。柱痕が確認されたものはなく、平面配置をみても掘立柱建物としては認識できない。遺物は出土していない。

第３節　遺物（第７・８図、PL. ７）

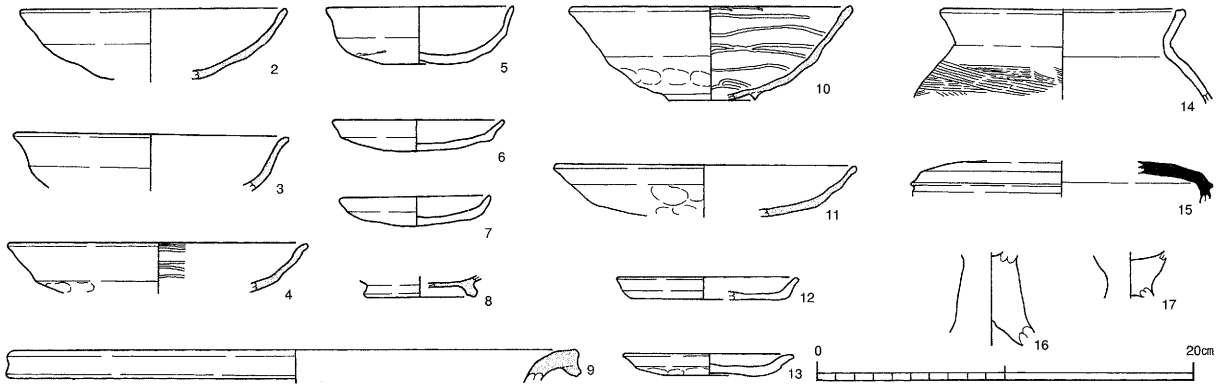
今回の調査では、SD01からの出土遺物がほとんどで、数量はコンテナ５箱である。SD01の遺物は、埋土の堆積状況から、流路としての機能を失ったのちのもの（１層）と、流路として機能していたころのもの（２層）とに大別できる。以下に図示する遺物は、すべてSD01から出土したものである。



第７図　SD01出土遺物－１

１層からの出土遺物には、瓦器椀（２・４）、土師器小皿（５・６・７）、瓦質甕（９）のほか、黒色土器（８）、須恵器杯蓋（15）、石鏃（１）があげられる。（２・４）は、内湾する体部で、口縁端部は外反し丸くおさめる。器壁の摩滅が激しく調整はわかりづらいが、内面はヨコナデののちやや斜め方向のヘラミガキを施し、外面には指頭痕がみられる。土師器皿には、深身のもの（５）と、そうでないもの（６・７）がある。（５）は、灰白色で緻密な胎土である。器壁の摩滅が激しく調整はわかりづらいが、外反する口縁部の内外面はヨコナデを施し、底部外面には指頭痕がみられる。また、体部外面に接合痕が残る。（６）は明茶褐色の胎土で１㎜以下の砂粒をごく僅かに含む。外反する口縁部の内外面にヨコナデを施し、底部外面には指頭痕、底部内面には一方向のナデがみられる。（７）は明褐色の胎土で１㎜程度の砂粒を多く含む。器壁の摩耗が激しく調整がわかりづらいが、外反する口縁端部内外面にはヨコナデを施し、底部外面には指頭痕がみられる。（８）は内外面ともに炭化し黒色を呈する。器壁の摩耗が激しく、調整は観察できない。（９）は器壁の内外面とも炭化し黒色を呈する。器壁の摩耗が激しく、調整は観察できない。口縁端部断面に成形時に折り返した痕跡がみられる。（15）は外面は回転ヘラケズリ、内面には回転ナデがみられる。これらの出土遺物から、１層の堆積時期はおおむね13世紀代と考えられる。

２層からの出土遺物には、瓦器椀（３・10・11）、土師器小皿（12・13）のほか、土師器甕（14）、土師質高杯（16）、製塩土器（17）があげられる。（３）は口縁端部がおおきく外反し丸くおさめる。口縁端部の内外面にはヨコナデを施し、体部下半の外面には指頭痕がみられる。器壁の摩耗が激しく調整は観察できない。（10）は内湾する体部下半からほぼまっすぐにのび、口縁端部は外反し丸くおさめる。口縁部外面にはヨコナデを施し、体部外面下半には指頭痕がみられ、内面にはナデののちヘラミガキを施す。底部には断面三角形の高台がみられる。（11）は内湾する体部下半から、ほぼまっすぐにのびる



第８図　SD01出土遺物－２

口縁部で、端部は外反し丸くおさめる。口縁部外面にはヨコナデを施し、体部外面下半には指頭痕がみられる。内面は器壁の摩耗が激しく調整は観察できない。(12) は、胎土が明橙色で砂粒をほとんど含まない。外反し丸くおさめる口縁端部をもつ。口縁部外面にヨコナデを施し、底部外面には指頭痕、底部内面には一定方向のナデがみられる。(13) は、胎土が灰褐色で砂粒をほとんど含まず緻密である。口縁端部は外反し丸くおさめる。口縁部外面にはヨコナデ、内面は口縁部内面にヨコナデののち一定方向のナデを施す。底部外面は、成型時の凹凸が残り、指頭痕が僅かにみられる。ほとんど調整をおこなっていない。また、口縁端部には煤化した箇所がみられ、灯明皿として使用されたものと考えられる。(14) は口縁端部にやや内傾する面をもつ。体部外面にハケメが残り、頸部から口縁部内外面にかけてはヨコナデを施す。体部の調整ののち口縁部の調整をおこなっており、体部内面にはナデがみられる。(16) は高杯の脚柱部である。脚裾内面に成形時のシボリ痕がみられる。器壁の摩耗が激しく調整は観察できない。(17) は製塩土器の脚部である。全体に赤変しており、二次焼成をうけている。器壁の摩耗が激しく調整は観察できない。これらの出土遺物から、２層の堆積時期は12世紀後半代以前と考えられる。

参考文献
尾上実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』(1983)
田辺昭三『須恵器大成』(1981)

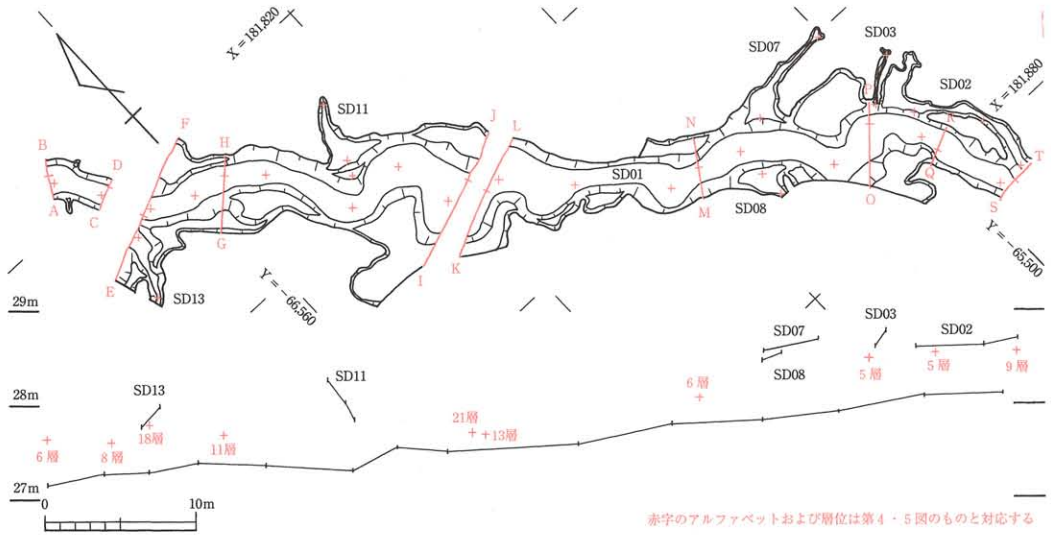
第４章　泉南市域における灌漑体系の変遷について

第１節　SD01とその他の溝との関係（第４・５・６・９図、付図１）

今回の調査では、灌漑水路と考えられる溝群を検出した。最大の規模をもつSD01と、SD01の遺構断面で確認される埋没過程で掘り返された小規模な溝群、さらにSD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群（SD02・07・08・11・13）である。現地調査では、これらの溝を平面検出により関連づけることができなかったが、SD01の灌漑施設としての変遷を考える際に、SD01とそこから枝状に派生するかたちで検出した溝との関連性を把握する必要がある。つまり、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群は、SD01の分水路なのかどうか、またその場合、SD01の掘削当初から伴うものなのか、あるいはSD01の埋没過程で掘り返された小規模な溝に伴うものなのかなど、ここで問題としている遺構相互の関連性にはいくつかのパターンが想定でき、それによって遺構の解釈もかわってくるからである。以下、現地調査では確認できなかった溝群相互の関連性についてみることとする。

現地調査では、SD01と、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群とは、検出時に平面的な切り合い関係は認められなかった。このことから、両者とも完全に埋没し灌漑施設として機能しなくなったのは、ほぼ同時期と考えてよいであろう。つまり、両者は少なくとも完全に埋没する直前において同時に機能していたと考えられ、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群は、SD01の分水路である可能性が高い。では、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群は、SD01の掘削当初から伴うものなのか、それとも埋没過程における溝に伴うものなのかを、SD01とそこから枝状に派生するかたちで検出した溝群との遺構底面の比高差をもとに詳しくみることとする。

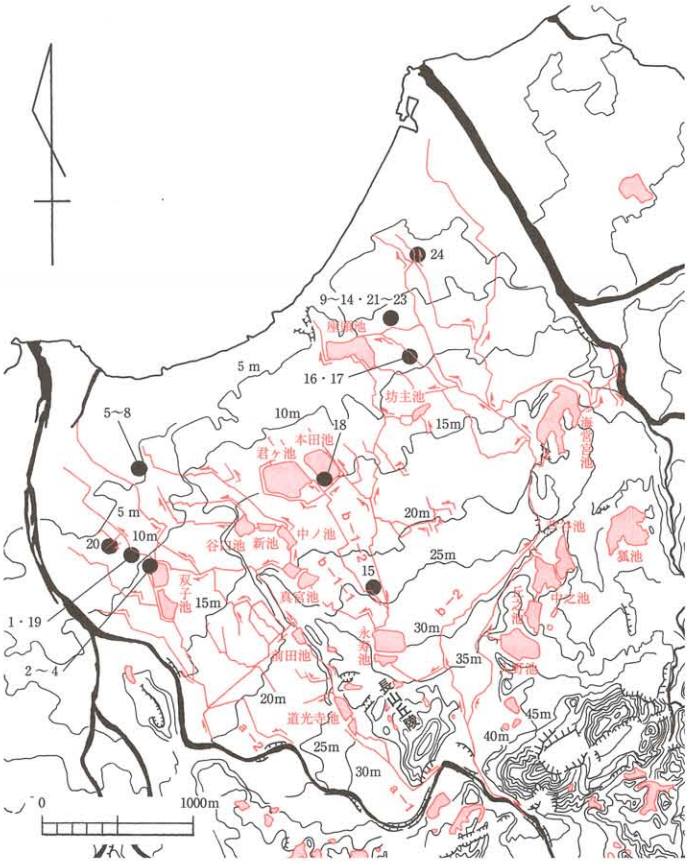
第９図は、SD01を完掘した時点での遺構底面のレベルと、SD01の遺構断面で確認できる埋没過程における溝のうち最上層のものの底面レベル、そしてSD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群の遺構底面のレベルを合成したものである。これによると、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群が、SD01が掘削された当初から伴うものなのか、あるいは埋没過程いおいて掘り返された小規模な溝に伴うものなのかを考える際、可能性として以下の二通りの組み合わせが考えられる。



第９図　SD01とその他の溝との遺構底面レベルの比高差（断面１/80・平面１/1000）

ひとつは、SD01が掘削された当初のものとの組み合わせである。SD01を完掘した時点での遺構底面レベルと、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群の遺構底面のレベルとの比高差は、0.5～1mほどある。この場合、SD01の水量が常時高水位で維持されるか、溝が合流する地点付近に堰などの調水施設が必要となる。

もうひとつは、SD01の埋没過程における溝との組み合わせである。SD01の埋没過程における溝のうち最上層のものと、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群との遺構底面レベルの比高差は、0.1m程度である。こちらは、簡易な施設で調水が可能な比高差といえる。



第10図　市域の水利水系

SD01の遺構底面には、堰などの調水施設の痕跡はみられず、先にみた各溝群の遺構底面の比高差を考慮すると、SD01から枝状に派生するかたちで検出した溝群（SD02・07・08・11・13）は、SD01の埋没過程において掘削された小規模な溝と一連の遺構であり、分水路として機能していた可能性が高い。このような想定をふまえて、今回の調査で検出した溝群の関連性は、以下のような変遷が想定できる。

1期　SD01を掘削する。

2期　SD01の埋没過程において、小規模な溝が掘削され、機能維持が図られる。

3期　SD01の埋没過程において、小規模な溝が幾度か掘削されるなか、枝状に派生する溝（SD02・07・08・11・13）を併設する。これらの溝群は、SD01の埋没過程において掘り返された小規模な溝の分水路の役割を果たす。

4期　3期の形態を維持したまま完全埋没する。

第2節　泉南市域の灌漑体系におけるSD01の位置づけ（第10図、第1表）

前節では、SD01の掘削後における埋没過程での機能維持や、分水路として新たに枝状にのびる水路群（SD02・07・08・11・13）の併設など、SD01の掘削から埋没までの変遷過程を示した。ここでは視野をひろげ、今回検出した灌漑水路の水源地やその用水のおよぶ範囲など、泉南市域における灌漑体系のなかでの位置づけを検討し、さらにこれまでの発掘調査の成果と対照することで、泉南市域における中世を前後する時期の灌漑体系の変遷過程を素描してみたい。

第１表　市域における灌漑遺構一覧

No	遺跡名	遺構	遺構名	幅(m)	長さ(m)	深さ(m)	地形分類	築造年代	廃絶年代	文献
1	男里	溝	SD03	2.1	4～	0.5	氾濫原及び谷底低地	7C	－	①
2	男里	溝	溝2	1	5.5～	0.15	旧河道	7C中	－	②
3	男里	流路・しがらみ	流路1	14	29～	2	旧河道	7C後－8C	－	③
4	男里	溝	SD01	0.15	10～	0.15	旧河道	11－12C	13C	④
5	戎畑	溝	大溝	4	100～	1	氾濫原及び谷底低地	11C	13C	⑤
6	戎畑	溝	SD01	0.6	1.6～	0.5	氾濫原及び谷底低地	11C	13C	⑥
7	戎畑	溝	SD02	0.7	1.6～	0.1	氾濫原及び谷底低地	11C	14C末	⑦
8	戎畑	溝	SD03	1	1.4～	0.5	氾濫原及び谷底低地	11C	14C末	⑧
9	岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD02	3～	12～	1.3	洪積段丘低位面	12C初	14C末	⑨
10	岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD03	1.6	10～	0.4	洪積段丘低位面	12C初	14C末	⑩
11	岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD05	1～1.5	18.4～	0.1～0.2	洪積段丘低位面	12C初	14C末	⑪
12	岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD06	0.6～1.2	30～	0.1	洪積段丘低位面	12C初	14C末	⑫
13	岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD07	0.5～1.2	23～	0.15	洪積段丘低位面	12C初	14C末	⑬
14	岡田西・氏の松	溝	第2調査区SD02	0.4～0.6	15～	0.1～0.15	洪積段丘低位面	12C初	14C末	⑭
15	上代石塚	溝	SD01	16	100～	1～1.5	洪積段丘中位面	12C	13C	本書
16	中小路西	溝	SD01	1～3.5	19	0.4	洪積段丘低位面	中世（11－13C）		⑮
17	中小路西	溝	第2トレンチ	0.4～0.7		0.05～0.07	洪積段丘低位面	中世（11－13C）		⑯
18	本田池	溝	SD01	0.64	36	0.1～0.4	洪積段丘低位面	中世（11－13C）		⑰
19	男里	溝	SD02	1.4	4～	0.4	氾濫原及び谷底低地	中世（11－13C）		⑱
20	男里	溝	大溝	2～		1.4～	氾濫原及び谷底低地	中世（11－13C）		⑲
21	岡田西・氏の松	井戸	第2調査区SE01	5		0.9	洪積段丘低位面	14C末－15C初	－	⑳
22	岡田西・氏の松	井戸	第1調査区SE01	6		1.3	洪積段丘低位面	14C末－15C初	－	㉑
23	岡田西・氏の松	溝	第1調査区SD01	0.3～0.6	16～	0.1～0.2	洪積段丘低位面	14C末－15C初	－	㉒
24	岡田	井戸	SX01	2～	4～	0.4～	洪積段丘低位面	－	－	㉓

※表中のNoは第10図のドットに付した番号と、文献番号は文末注番号とそれぞれ一致する。

まず、今回の調査で確認した灌漑水路群の水源地と用水のおよぶ範囲を想定するにあたり、現在の水路網および地形を参考にする。第10図は、泉南市域における現在の溜池と主な水路およびコンターを合成したものである。溜池および水路は昭和59年大阪府発行の1/2500都市計画図で確認し、地図上で不明な個所のみ現地を踏査して確認した。また、図示している水路は、溜池間をむすぶものや水路網がおよぶ範囲など基幹となるもののみを図示した。コンターラインは平成4年国土地理院発行の1/25000地形図をもとにした。

現在、市域をカバーする灌漑体系は、井堰など河川からの取水口と水路網がおよぶ範囲から、長山丘陵西側の沖積地と、長山丘陵東側の洪積段丘、そして新家川および柳谷川が形成するいわゆる新家谷の3つに大別できる。ただし、ここでは新家谷のものについては図示しておらず、以下は前述の3つの灌漑体系のうち、SD01に関連する長山丘陵の西側および東側のものについて検討する。

長山丘陵西側の沖積地にひろがるものを水路網aとする。地形分類では旧河道や氾濫原及び谷底低地と沖積段丘にあたる地域におよぶもので、岡中、幡代、男里、馬場の周辺にひろがる水路網である。水源となる井堰は、金熊寺川右岸の愛宕山南裾の標高37mの地点と、幡代集落の南側の標高23mと18mの地点に設置されている。水路網aは、さらに細かくわけることができる。これは、長山丘陵西裾に位置する道光寺池から前田池を経て双子池東側にのびるものと、幡代や馬場集落周辺にひろがりつつ双子池を経て男里集落へのびるものであり、前者を水路網a－1、後者を水路網a－2とする。

長山丘陵東側の洪積段丘にひろがるものを水路網bとする。地形分類では洪積段丘中位面および低位面にあたる地域におよぶもので、信達牧野、市場、大苗代、中小路、北野、樽井、岡田などにひろがる水路網である。水源は、金熊寺川右岸の信達六尾集落の北側標高46mの地点に設置されている築之井井

堰である。水路網ｂは、府道大阪和泉泉南線の佐田交差点付近で北西および北東方向に分岐する。前者を水路網ｂ－１、後者を水路網ｂ－２とする。

水路網ｂ－１は、永寿池へそそいだのち、真宮池・中ノ池・新池・谷口池へのびるものと、直接君ヶ池や本田池にのびるもののふたつに分かれる。前者を水路網ｂ－１－１、後者を水路網ｂ－１－２とする。また、水路網ｂ－２は、丘陵上に位置する入野池や丘ノ池、中ノ池から用水をうけつつ海営宮池にそそぎ、海営宮池からは信達大苗代、中小路、北野を経て岡田までおよぶ。

これらの水路網がおよぶ範囲を界するのは、長山丘陵や座頭池南側に位置する段丘面上の浅谷など、東西方向に比高差のある地形である。つまり各水路網は、地形に即して設置され末端にいくほど細かな単位に分節しているといえる。ただし、各水路網は完全に独立して機能しているのではなく、隣り合う水路網で用水をうけたり、分流や合流を繰り返していることから、相互に補完しながら機能していることがわかる。

このような現在の灌漑体系をもとに過去の灌漑体系を検討する際、比較の対象となる現在の地形と過去のそれとに著しい変化がないことが前提となる。筆者には、地形発達史的な視点でこの問題について言及する力量はないが、論を進めるにあたり基本的な考え方を以下に示す。市域の地形分類をみると、市域東西を流れる男里川や樫井川などの河川は顕著な沖積地を形成しておらず、そのほとんどが洪積段丘面である。このことからすると、浸食作用や沖積作用により地形がおおきく改変をうける範囲は河川下流域に限られており、現在の地形の大半が過去のものと大差ないといえる。この仮定が成り立てば、現在の水路網が形成する灌漑体系は、過去の灌漑体系を復原する際に有効な資料となるのではなかろうか。

このような仮定のもとに、まず今回の調査で検出したSD01などの溝群の井堰などの取水口の推定と用水のおよぶ範囲など具体的な機能について、次に現在までの発掘調査の成果をもとに泉南市域における耕作地の開発過程と灌漑体系の変遷を素描してみたい。

まず、SD01の用水がおよぶ範囲についてみてみたい。現在の水路網のうち、SD01と併走するように調査区西側をとおる水路がみられる。これは水路網ｂ－１－２にあたり、永寿池の吐水口から北流し君ヶ池と本田池にそそぎこみ、樽井までおよぶものである。つまり、SD01の用水がおよぶ範囲は、おおよそ水路網ｂ－１－２の範囲内だと想定できる。

次に、現在までの発掘調査で確認した灌漑施設をもとに、市域における灌漑体系の変遷と耕地化への開発過程を素描する。第１表は、市内の遺跡における灌漑施設と考えられる遺構をまとめたものである。男里遺跡では７～８世紀代の水路やしがらみなどが、戎畑遺跡では11世紀頃の溝が確認されている。この時期のものは、いずれも旧河道や氾濫原などの沖積地に位置する遺跡でのみ確認されている。上代石塚遺跡、岡田西遺跡、氏の松遺跡、中小路遺跡、本田池遺跡など洪積段丘に位置する遺跡では、12世紀以降の溝が確認されている。このうち、上代石塚遺跡、岡田西遺跡、氏の松遺跡での調査成果は、灌漑水路の変遷過程を辿ることができる資料である。いずれも掘削当初は大規模な灌漑水路であったが、埋没過程において小規模なものへと移行していき、やがて埋没する。上代石塚遺跡の場合では、埋没するまでに、基幹となる水路から枝状にのびる水路がとりつく段階が加わる。14世紀末以降になると、洪積段丘面に位置する岡田遺跡、岡田西遺跡、氏の松遺跡で井戸が確認されている。

発掘調査で確認した灌漑遺構の分布や時期と、現在の灌漑体系とを対比することで、耕地化に伴う開発がおよんだ範囲とその時期を想定すると、沖積地にあたる地域をまかなう水路網ａ－２が７世紀以降

に、洪積段丘にあたる地域をまかなう水路網ｂ－１－２と水路網ｂ－２が12世紀以降に、それぞれ機能していたと想定できる。また、14世紀末以降になると、溝が埋没し機能を停止した後に井戸が利用されるようになる。これらを単純化すると以下のようになる。

１段階（７世紀～11世紀）

男里川右岸の沖積地に水路網が整備された段階。開発がおよんだ範囲は、最大でも水路網ａ－２の範囲内と考えられる。灌漑体系の整備により、この範囲における水路網の整備がはじまったのは、現時点の資料では男里遺跡の調査例から７世紀代ではあるが、男里遺跡では弥生時代中期以降の集落が確認されており、弥生時代以降男里川右岸の沖積地が耕作地として利用されていたことは想像に難くない。しがらみなどの大規模な灌漑施設を伴う開発がはじまった時期をこの段階と考えており、今後時期的にさかのぼる可能性が多分にある。

２段階（12世紀～14世紀）

前代に灌漑体系が整備された男里川右岸の沖積地に加えて、市域平野部の大半を占める洪積段丘に水路網が整備された段階。座頭池北東に位置する岡田西遺跡や氏の松遺跡が水路網ｂ－２の末端に位置することから、この段階に新たに水路網がおよんだ範囲が、水路網ｂのほぼ全域と考えられる。

また、この段階においてさらに細かな灌漑体系の変遷がみられる。上代石塚遺跡、岡田西遺跡、氏の松遺跡で、基幹となる水路が掘削当初の大規模なものから埋没過程において小規模なものへと変化している。さらに上代石塚遺跡では、基幹となる水路（SD01）に分水路（SD02・07・08・11・13）が新たに設置される。このような細かな変遷から、この段階は以下の３段階に細分できる。

２－１段階　洪積段丘の開発が始まった当初、岡田西遺跡、氏の松遺跡、上代石塚遺跡において、最大幅10m、深さ１m程の大規模な溝の掘削がおこなわれている。氏の松遺跡などは水路網ｂ－２の末端に位置することから、この時期に構築された灌漑体系は水路網ｂの全域におよぶものであったといえる。

２－２段階　前段階で大規模な水路が確認されている岡田西遺跡および氏の松遺跡や上代石塚遺跡では、水路自体の機能維持はされているものの、いずれも規模の縮小がみられる。このことは、開発の進展に伴う複数の水路網の設置されたことによるものなのか、溜池の築造による調水機能の向上など灌漑体系自体の機能向上が図られたのか、様々な要因が想定できる。いずれにせよ、灌漑水路の規模の縮小は、前段階にはなかった新たな灌漑施設の整備がおこなわれたことを示すもので、多元的な灌漑体系の整備がすすんだ段階といえよう。

２－３段階　上代石塚遺跡では、SD01の埋没過程において掘り返された小規模な溝に、分水路(SD02・07・08・11・13）が新たに設置される。このことは、洪積段丘の開発が始まった当初は耕地化の対象でなかった中位段丘面などの地域が、開発の進展により耕地化の対象となり、周辺の耕作地へ用水を引き込むための枝となる水路が設置されたことを表すとも考えられる。つまり、第２段階の当初に低位段丘面で行われていた開発が、その進展に伴い中位段丘面にもおよんできたことを示すのではなかろうか。

第３段階（14世紀末～）

主とする用水を得る施設が水路網から井戸へと灌漑形態が変換した段階。上代石塚遺跡や岡田西遺跡および氏の松遺跡では水路が完全に埋没する。このうち岡田西遺跡および氏の松遺跡は、水路にかわり

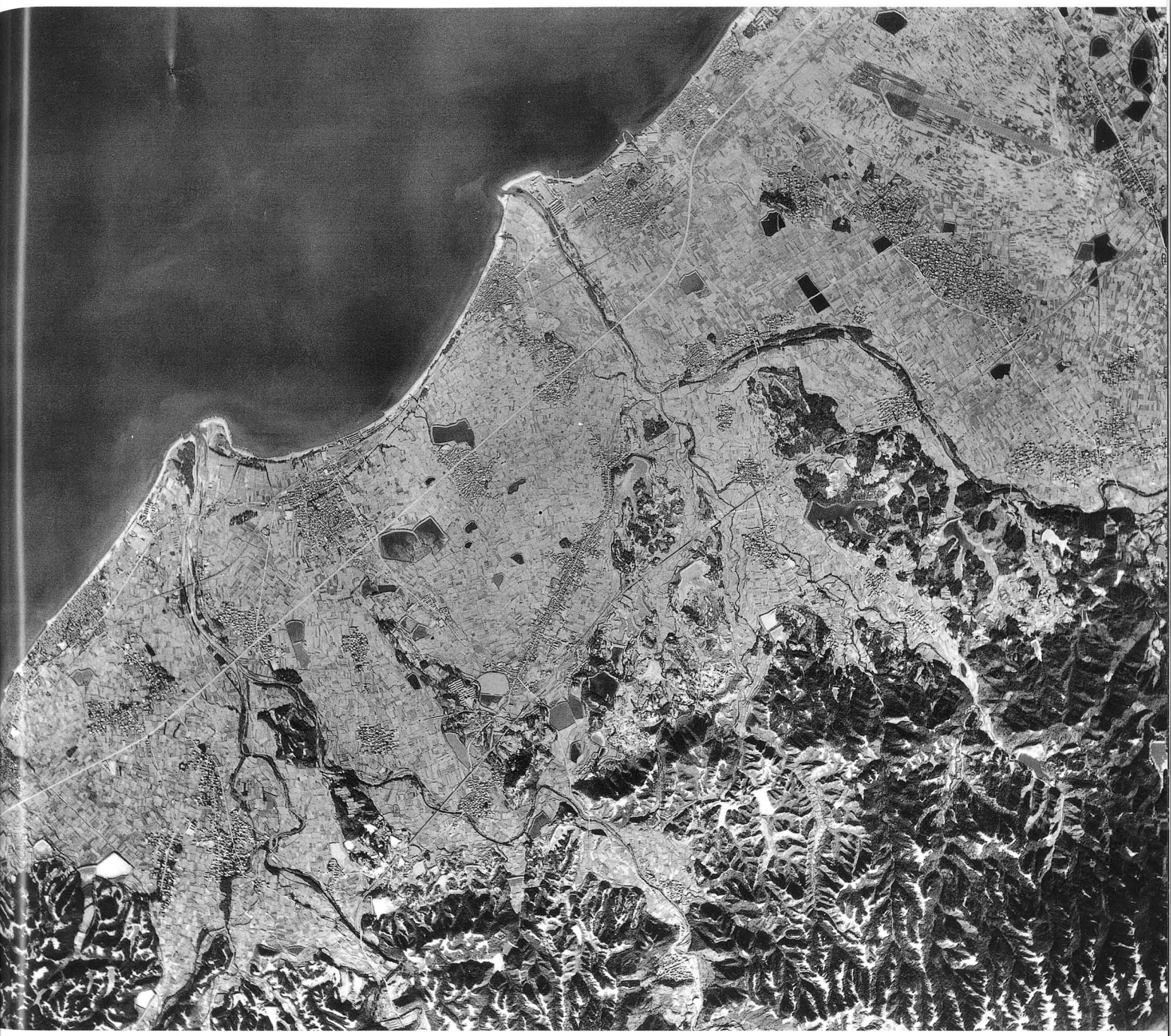
井戸が確認されていることから、水路網が灌漑施設としての機能を停止したのち、井戸がそれにかわって機能し始めたと考えられる。つまり、この段階は灌漑体系自体が大きく変換した時期であり、前代の水路網による灌漑形態から井戸による灌漑形態に重きをうつした段階といえる。さらに、維持管理に多大な労力を必要とし大量の用水を供給できる水路から、維持管理が水路に比べ容易ではあるものの水溜程度の機能しか見込めないの井戸への灌漑施設の変換は、水田から畑作に移行するなど栽培作物の変換も想定でき、市域全体における傾向であった可能性も指摘できる。

第3節　まとめ

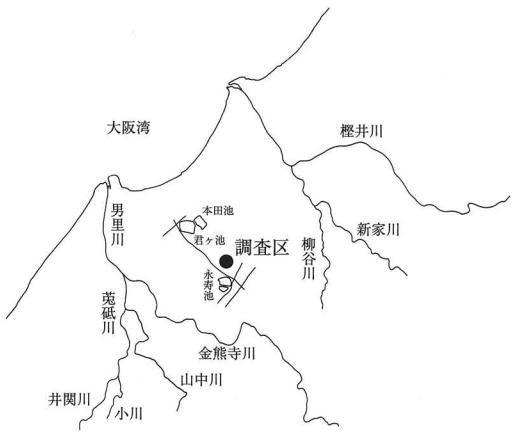
文献資料によると、泉南市域に関連のある荘園として、信達荘があげられる。信達荘は、嘉承2（1107）年に摂関家が支配していたとの記録があり、その後建長5（1253）年には近衛家の本所となっていたことが記録にある。また、建武4（1337）年には足利尊氏により紀伊国伝法院（根来寺）へ寄進されている[24]。溜池に関するものとして、『日輪山清明寺代々記幷三谷古記』に大池（庄平太池）が延文5（1360）年に築造されたとある[25]。また、隣接する日根荘では、文暦1（1234）年の時点で複数の井堰や溜池が存在していることを示す史料がある[26]。これまで指摘した泉南市域における灌漑体系の変遷と開発がおよんだ範囲の諸段階は、発掘調査成果の蓄積はもとより、花粉分析等の古環境や、地形発達史的な視点のほか、文献資料との対比および検証が必要であろう。関連諸分野の成果を併せみることで、より鮮明な灌漑体系の発達史をうかびあがらせることができるのではなかろうか。

注　①　泉南市教育委員会「92－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
②　大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
③　②と同じ。
④　泉南市教育委員会「97－7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1999）
⑤　泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）
泉南市教育委員会「戎畑遺跡既往の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
⑥　泉南市教育委員会「97－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
⑦　泉南市教育委員会「97－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
⑧　泉南市教育委員会「97－3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
⑨　泉南市教育委員会『岡田西・氏の遺跡発掘調査報告書』（1995）
⑩　⑨と同じ。
⑪　⑨と同じ。
⑫　⑨と同じ。
⑬　⑨と同じ。
⑭　⑨と同じ。
⑮　泉南市教育委員会「93－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）
⑯　泉南市教育委員会「93－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
⑰　泉南市教育委員会「94－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
⑱　泉南市教育委員会「92－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
⑲　泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
⑳　⑨と同じ。
㉑　⑨と同じ。
㉒　⑨と同じ。
㉓　泉南市教育委員会「94－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
㉔　宮川満「第二章　荘園の動向」『大阪府史』第三巻中世編一（1979）
㉕　仲村研「第三章　戦国時代の泉南地方」『泉南市史通史編』（1987）
㉖　井田寿邦「第Ⅴ章 第2節 Ⅰ－Ⅱ 用水体系の歴史的概観」『日根荘総合調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会（1994）

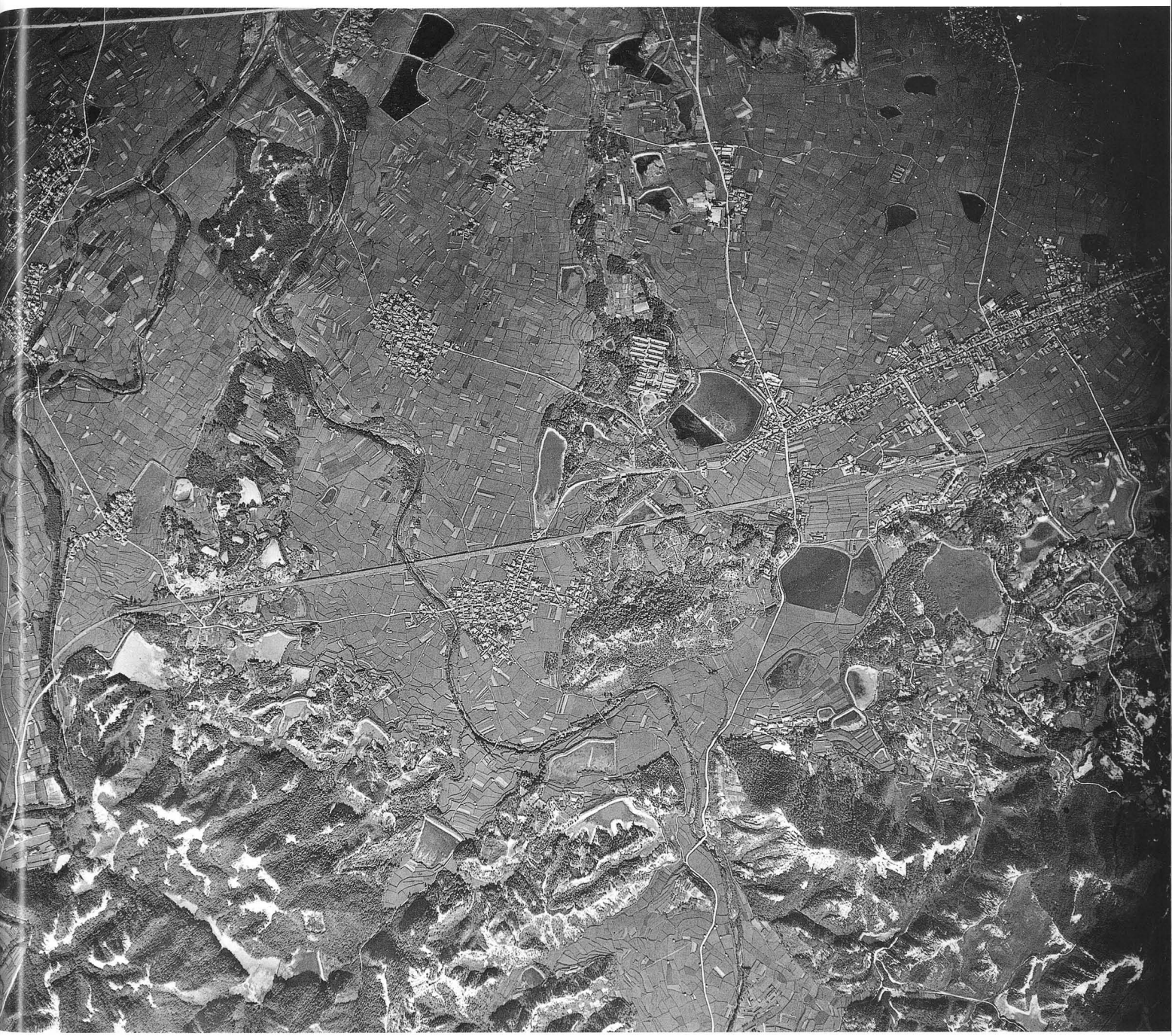
図　　版



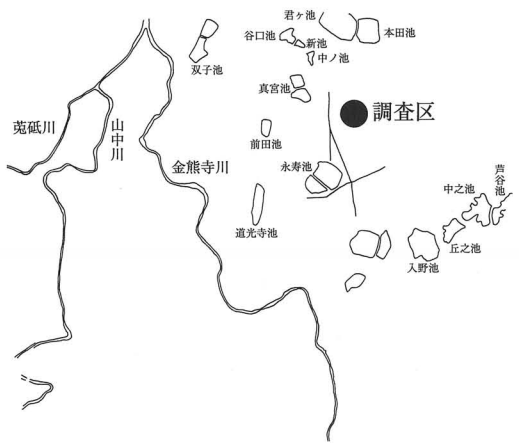
1947．9撮影（左上が北）



PL. 1　調査区周辺空中写真



1947.10撮影（右上が北）



PL. 2　調査区全景－1

（右上が北）

調査区遠景（南東から）

調査区全景（同上）

SD01・02（南東から）

SD01・11（北西から）

SD01 I － J 間断面付近（南東から）

SD01・02・03・07・08（北から）

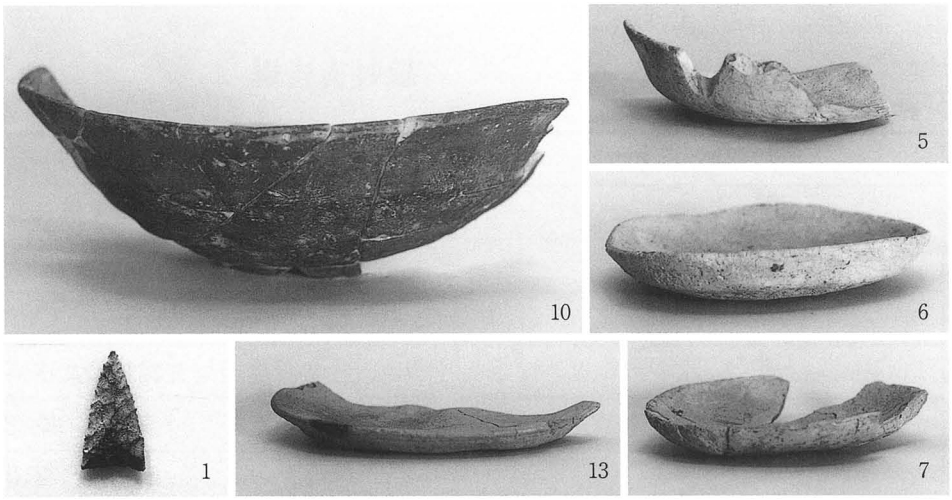
S－T間断面（北西から）

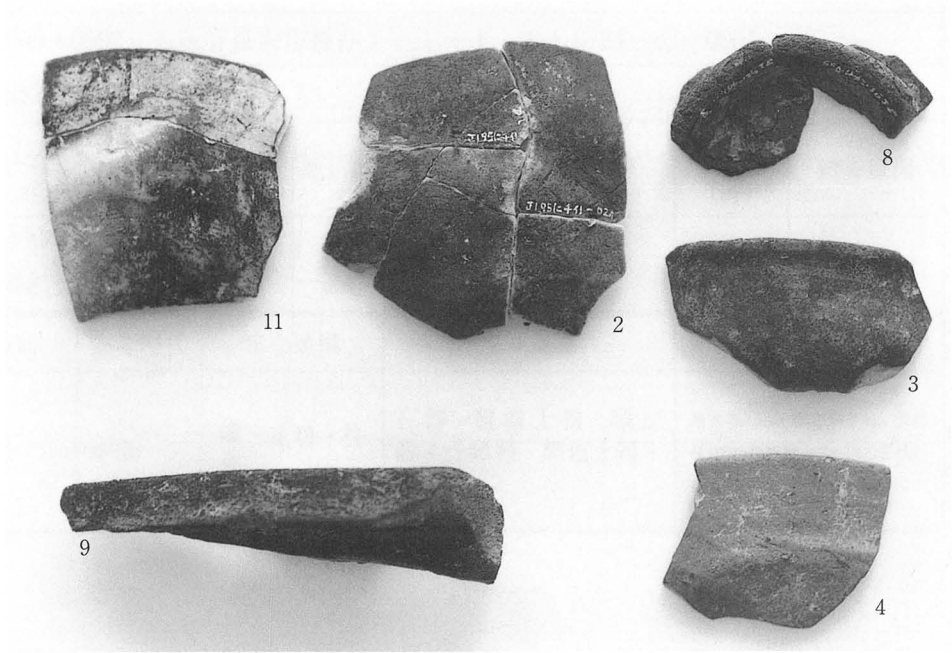
手前：Q－R間断面　奥：O－P間断面（南東から）

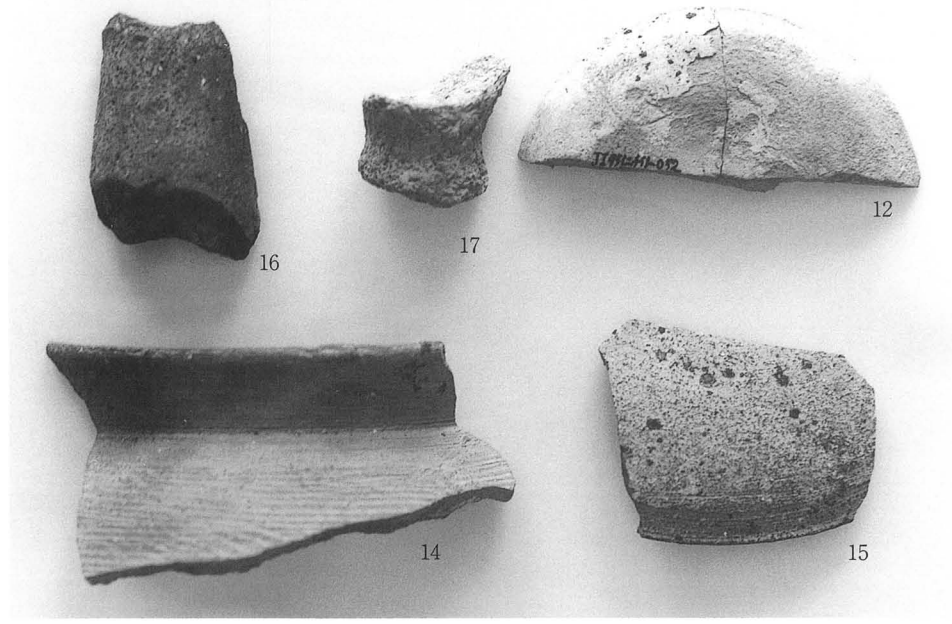
M－N間断面（南東から）

E－F間断面（同上）

PL. 8　SD01出土遺物







報告書抄録

ふりがな	じょうだいいしづかいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上代石塚遺跡発掘調査報告書
副書名	—
巻次	—
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	河田泰之
編集機関	泉南市教育委員会
所在地	〒590－0592　大阪府泉南市樽井１－１－１　Tel.0724－83－0001
発行年月日	西暦2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村名	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m^2)	調査原因
じょうだいいしづか 上代石塚遺跡	おおさかふせんなんし 大阪府泉南市 しんだちまきの 信達牧野	27228	JD	34度 21分 33秒	135度 16分 39秒	199509－199511	3398	大規模店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上代石塚遺跡	生産	中世	溝・土坑・柱穴	石器・製塩土器・須恵器・土師器・黒色土器・瓦器	最大幅22m、深さ約１m、検出長100mの中世（12～13世紀代）における灌漑水路を検出。

上代石塚遺跡発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書　第35集

２００１年３月３１日

編集・発行　大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井１丁目１番１号

Tel. 0724-83-0001

印　　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所

1：300

上代石塚遺跡発掘調査報告書　付図１　遺構平面図

高さの基準は、T.P.表示とする。